

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

「私とこんな関係になってしまったって…本当に良かったの？ジュドー？」

サイド6にある、ごくありふれたラブホテルの一室で男女の営みを済ませたハマーンとジュドーが、お互い裸のまま抱き合っていた。ジュドーはハマーンの胸に顔を付け、時折ピアスが付いた乳首を優しく舐め回していた。その行為に、頬を染めて感じながらも愛しい表情で彼を見つめているハマーン。しばらくそんな時間を過ごしていると、やがてジュドーがこう囁いた。

「うん…そんな事…決まってるだろ？」

「決まってるって…どっち？」

「どっちだと思う？」

ジュドーが意地悪な表情で言った。

「どっちって…その…」

ハマーンが困惑した表情で言葉に詰まっていると、ジュドーは彼女の股間に手を当て、クリトリスと前の穴を優しくまさぐった。

「あっ！あんっ！…ダメ…」

「ここは本当に正直なんだよね。君は本当にセックスが好きだよね」

「確かにセックスは好きだけど…好きな人と愛し合うから気持ち良いのに…意地悪なのね。あっ、触っていると…さつき中に出したジュドーのミルクが出てきちゃうわよ」

「あっ！さつきからラブジュースだと思ってたのはそれか…」

彼はそう言うとハマーンの股間を愛撫していた手を見た。確かに彼女の愛液の他に、うっすらと白い彼

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

の精液が付着していた。そして独特の匂いがする。

「この匂いって、ホント何年経っても慣れないや……自分が出したモノなんだけどね……」

ジュドーがベッドの上にあるティッシュを取ろうとした時、ハマーンがそれを制止して、彼の汚れた手を掴んでこう言った。

「私は……この匂い……とつても好きよ」

「えっ？ そうなの？ ……じゃあ、これ……舐めて綺麗になんて……出来る？」

「ふふっ、勿論よ」

そう言いつつ、ハマーンは自分の愛液とジュドーの精液が付着している彼の指先を愛しい表情で舐め始めた。その光景をじっと見ていたジュドーだったが、やがてその行為に興奮した為か、不意にハマーンに抱き付き、唇を重ねた。そして舌を絡める位の濃厚なキスに驚きながらも戸惑うハマーン。

「ちよっと！ どうしたの！？ 急に……！」

「君が俺のミルクを舐めている姿を見たら、とても愛しくなって……また興奮してきちゃった」

そう答えると、ジュドーは首筋から乳首へと舌を這わせていった。

「あっ！ ああっ！」

頬を赤く染めながら、快樂の中へと堕ちていくハマーン。そしてそれはジュドーが腰からお腹、そして太ももへと舌を這わせ、クリトリスを執拗に舐め始めた時、それは最高潮に達した。

「あっ！ イクッ！ ああっ！ ……！」

ジュドーはハマーンが絶頂に達しても、その行為を止めようとはしなかった。その間にハマーンは連続

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

して一分以上に渡って何度も小刻みに体を震わせ昇天させられた。そしてやっとハマーンがその行為から解放された時は、全身の力が抜けて長距離ランナーの様に激しく肩で息をしていたが、その表情はとても幸せに満ちあふれていた。それを無毛の股間越しにニヤニヤと眺めるジュドー。それに気付いたハマーンは、少し恥ずかしそうな表情をしながら答えた。

「はあ……。とっつても恥ずかしい所を見られちゃったわ……。もう、イツてもイツてもやめないんだから頭が真っ白になって溶けてしまいそうだったわよ」

「何度も昇天した姿を見せてもらったけど、とっつても可愛かったよ」

「ぞっ…俗物ね」

ハマーンは真っ赤な顔でそう言いながら起き上がり、ジュドーに激しく抱き付くと、今度は彼女の方から濃厚なキスをした。その行為を続けながらお互いの体をまさぐり合う二人。やがてジュドーが呟いた。

「俺はいつもだけど、今日は君も積極的なんだね」

すると、ハマーンはジュドーの目を見つめながら、耳元でこう囁いた。

「私だっていつもこんな感じよ。愛している人にはいつも全力でプレイしてるわ。札には札を尽くすのが私だもの」

そう言う彼女の髪を優しくかき上げて、うなじにキスをするジュドー。

「あんっ！」

「そーいやその昔……指導者の頃の君って、俺に仲間になってくれ！って言ったり、戦争中なのに俺の所まで会いに来てくれてたっけね……」

「……でも結局貴方は私の元へは来てくれなかったわよね。シヤアにも貴方にも拒否されて……それでも私は自分が信じる道を進むしか無かったわ……。孤独で……辛くて……息苦しい毎日だった……。それも今となつては思い出の一つだけど……ね」

「それでその頃自暴自棄になつて野外露出とかしてたんだ？」

「えっ？」

ジュードーの言葉に一瞬戸惑つたハマーンだが、頬を赤くしながら話し始めた。

「ええ。あの頃の私は自分の心を無理矢理押さえ込んでジオン再興の爲につて奮闘してたから、その反動も並大抵のモノでは無かったのよね。そういう軍事的な事、政治的な事を考えている間は問題無いけど、ふと自分の事とかを考える間が出来ると、言い様も無い不安で押し潰されそうになつていわ。それを誤魔化すのは……お酒や薬に逃げるのが一番なんだけど、廃人になるというよりもいざという時に行動出来なくなる訳にはいかなかったから、ひたすら快樂に身を委ねるしか無かったの……。そしてそれはやっぱりというか段々エスカレートしていくものなのよね……。アムロに見られて肉体関係を持った頃がピークだったかな……。私」

「どんな姿を見られたんだっけ？」

「えっ？それは……この前話したと思うけど……」

その時の事を思い出して顔を真っ赤にするハマーン。

「そんな事言わないでさ。もう一回君の口から聞きたいんだけど……」

そう言いつつジュードーはハマーンの股間を触つてみた。案の定興奮してたつぷりと濡れた状態だった。

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

それを確かめるとジュドーはニヤリと笑いながら言った。

「ほら。こんなに濡れててさ。体は正直だよ。俺の前で強がっても、君がMだという事……恥ずかしい事を告白して興奮する性格だって事は知ってるんだから……言っただけでスツキリしちゃいなよ。俺も手伝ってあげるからさ」

そう言いつつ、ハマーンの股間を優しく触るジュドー。クリトリスを集中的に触られた為か、ハマーンは軽く絶頂感を迎えた。

「ああっ！ああっ……」

ジュドーの行為は自分が告白しない限り終わらないと悟ったハマーンは、込み上げる快樂の波と戦いながらポツリと話し始めた。

「あっ……あの時……私はホテルで自分の体に縄……」

「縄？縄でどうやってたの？」

「縄で全身を縛って……深夜人気の無い公園へ……行って……トイレで身に付けていたコートを脱いで首輪を付けて、浣腸してからお尻に栓をして……公園を一周する筈……でした」

「ふくん。それを見られたんだよね。それとも自分から見られてくっついて迫ったのかな？」

「ああっ……いえ。余りにお腹が苦しかったので、途中引き返してトイレに入ろうとしたら……アムロが私の車を見付けて乗せて欲しいと公園内に探しに入ってきました」

「で？どうしたんだっけ？」

「わ……私はこんな姿を見られたら……破滅すると思い、植え込みの陰に隠れていたのですが、うっかり

音を出してしまつて……草むらの中に潜んでいたのを探し出されて……ああっ！！！」

その時、ジュードーが激しく股間をまさぐつた。部屋にハマーンの絶頂する声が響き渡つた。一分程痙攣し、薄く涙を浮かべながら荒い息をするハマーン。ジュードーは徐々に股間をまさぐる力を緩めながらこう囁いた。ちなみにこの内容自体は、以前ジュードーはハマーンと酒を飲みながら聞いているのだが、それとこういう行為の中で自白させるという羞恥プレイを楽しんでいるのであり、それはハマーン自体も十分理解していた。そういう行為の積み重ねで、人はより興奮しプレイが濃密なモノとなっていくのである。「そうなんだ。しかしまあ、そんな姿で見付かつて、よく平気でいられたもんだね。全裸に縄がけプレイの上に露出散歩、更に乳首とラビアにピアスして浣腸とストッパーのおまけ付きつて……どれ一つとっても変態なのにフルコースじゃん。そうだろう？」

そう言うと、ジュードーはハマーンのクリトリスを優しく摘んでこね回した。

「ああっ！はっ……はい。普段は気丈夫で人の上に立つ女性を演じてきましたが、実は快樂に身を委ねる一匹の変態雌犬なんです。あああっ……」

体がブルブルツと震え、前の穴と後ろの穴が収縮し、再び昇天するハマーン。しばらく彼女はその快樂の反動ゆえ動けなかったが、やがてジュードーを見ると、少し涙目になりながら言った。

「お前が……いえ、御免なさい。ジュードー、貴方があの時私の元へ来てさえくれれば……私もあそこまで不安にならなかつたと思うし……快樂に溺れる事も無かつた……思う。たぶん……」

「ふくん。難しいもんだね。何とかさ、こうやって関係持ったから判るんだけど、君つて先頭に立って指揮を執るよりは、指導者の右腕として動いた方が良かったんじゃないかと思つたんだけど……。誰だっ

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

たかな……この前の戦争でシャアと一緒に戦ってた女性で……君のような声だなあ……と思った人がいたと思うんだけど……」

「ナナイ・ミゲルの事？」

「そう！その人みたいな感じですか」

それを聞いたハマーンは少し苦笑した後、ジュドーを思いつ切り抱き締めて濃厚なキスをした。その行為に驚くジュドー。

「どっ！どうしたの！？いきなり？」

「貴方が彼女の事を評価してくれて嬉しいのよ」

「嬉しい？どうして？」

「彼女はね……元は私の部下だったの。でも地球圏での協力者が思ったよりも集まらなかったのと、グレイミー・トトの造反が時間の問題だと判った時、私が彼女をシャアの元へ送り込んだのよ」

「え！？そうだったの？」

「ええ、私が彼の趣味や性癖は知り尽くしてたから、精神的な支えになる為の事を全て彼女に教え込んで、アクシズの資金と、軍事機密書類を根こそぎ持たせた上に軍籍を抹消して一般人に擬装したりと、あの状況下で誰にも知られずに行うのは結構大変だったんだから……」

「……それもやっぱり……シャアの為なのかい？」

「そう……ね。私のネオ・ジオンはダカールを占拠した後はコロニー落としまでが限界だったし、負けて連邦に資産や技術を全て接收される位なら、本人が望むと望まないとに関わらず指導者としての位置に

着かねばならない人に託したかった……のだったと思う」

「君の野望を阻止した俺が言うのも何なんだけど……世の中って中々思い通りにはいかないもんだね。やっぱ……今もシヤアと一緒に戦えなかった事……後悔してるんかい？」

ジュドーの言葉に一瞬躊躇したハマーン。

「私と彼の道は違ってしまったけど、彼の隣で共に夢を見たいという想いは今でもある事は事実よ。例え私が彼と結婚出来ないとしても……ね。……でもあの頃、彼と決別した時、私はアクシズの組織を離れる訳にはいかなかったし、後々シヤアが彼の父の意思を継いで立ち上がる時が来た時の為に、抵抗する勢力を出来るだけ削いでおきたかったの。それに私自身にスペースノイド、アースノイドの怨嗟の念が向けられれば向けられる程、彼がそれを否定して民衆をまとめて支持を得る事が容易になると思ったし、その時出来る限りの事をしたつもりよ。そして私の進む道が敗北しか無いと判った以上は、それを出来るだけ長引かせて時間を稼ぐ事しか……考え……て……」

そこまで言った時、ハマーンの間から彼女の意識とは関係なく涙が溢れてきた。それに気付いたジュドーは、今度は彼の方から優しくハマーンを抱き締めて、優しく髪を撫でた。

「君は歴史上では『史上最悪の女の狂った戦い』とまで言われているけど……それはもう過去の話さ。ハマーン・カーンという女性は俺との戦いで戦死してるから、今ここに居る女性はその亡霊……いやアルティシア・マイネという全く別な女性……それでいいじゃないかな。俺もあの戦いで沢山の敵……君の同胞を結果的にだけ殺した訳だし……お互い信念があって戦った訳だから、生き残った者は、死んでいった者達の分も生きなきゃならない……ってね。はは、俺らしくも無い事言っちゃったかな」

「そんな事……無いわよ。貴方が今、そんな考えをする人間になったというだけで……私が戦って来た事も無駄じゃ無かったと思えるもの……。お願い……もう少しこのままでいさせて……」

「えっ？」

そう言うとジュードーは優しくハマーンを抱きかかえたまま、しばらくの間そのまま時を過ごすのだった。時折ハマーンから優しい波長がジュードーへと伝わってきて、シヤアと楽しく過ごしていた時のイメージが彼の頭の中に入ってきた。勿論、シヤアに限らず、アムロやセイラ、彼女と深い関係を持った人の映像が走馬燈のように頭の中を浮かんで消えていった。ハマーンのイメージがジュードーに伝わると言う事は、逆も同じニュータイプであるから伝わってしまう訳であるが、ジュードーは心を閉ざす事をせず素直に彼女へ自分という存在を解放した。やがて、前回別れてからの普段の行動から赤裸々な夜の性行為までお互い包み隠す事無く認識し合った。やがて、ジュードーがハマーンの耳元でそつと囁くように言った。

「この前俺と会ってから……ずいぶん色々あったんだね……。特にセイラさんとのプレイなんて、俺が君の心の中の映像として見て……本当に良かったの？」

その言葉に、顔を真っ赤にしながらハマーンは答えた。

「以前の私だったら……『よくも人の心の中を覗いたな！この俗物！』とでも言ったかもね」

「今は……大丈夫なのかい？」

「そりゃ……とつても……恥ずかしいけど……心を許した人に対しては……もう壁を作りたくは無いの。それに今の私は指導者の仮面を付ける必要も無いし……」

「確かに……俺も君になら心の奥を覗かれても……あ、やっぱ……少し恥ずかしいかな……」

「ふふつ。私のせいで『後ろの穴の快樂』に目覚めたみたいだけど……？こっそりバスルームでアナルオナニーしてる映像が見えたわよ」

「あ……そこまで判っちゃう訳……。そう考えると、人の心が通じ合うっていうのも考えもんだね。恋人同士で隠し事も出来なくなるし……」

「そこまで意思疎通が出来るのは、深く信頼し合ってるからよ。そうじゃないと何というかチャンネルが繋がらないみたいだし、それに意識的に押さえる事を知っていれば大丈夫よ」

そう言った後に、ハマーンは少し意地悪な表情で囁いた。

「私は貴方に全てをさらけ出したというのに、ジュードーは人に隠すような事が沢山あるのかしら？例えば私以外にて何人もの女性に『種付け』しまくってるとか……？」

「種付けって……えらくストレートな言い方を……って……全てお見通しみたいだから白状するけど、この前君に一通り調教されてから、ストレスが溜まってるらしくて性欲に歯止めが効かないんだよね。だから街で口説いた女性から商売の女性まで、ノーマルからアブノーマルまで色々経験してみたよ。もっとも葉だけには手を出してないけど。そんで毎回もうこれっきりにしようと思つて徹底的にミルクを絞り出したり、前立腺とかの快樂を求め過ぎてクタクタになって……でも満たされなくて、またしばらく経つと同じ事……いやそれ以上の事にとエスカレートして……何だか君と同じだね……」

その告白にハマーンは優しくこう言った。

「あの頃の私って本当に自分勝手に我が儘な女よね。貴方に拒絶されても仕方が無かったと……今なら思うわ」

そう言つて悲しい表情のハマーンに、ジュドーは優しくキスをすると目を見ながらこう言った。

「あの頃のは君は自分の組織の事で、そして俺は俺自身の事で精一杯だったからお互いがお互いの事を考える余裕なんて無かったから……。でも今の俺なら君の側と一緒に夢を見られる位に成長したと思うけど……？」

「ふふっ。今更とはいえジュドーに告白されて嬉しいんだけど……さつき快樂の追求に歯止めがきかないって言つた後だから、今一つ説得力に欠けるわね。私を貴方の性処理の道具にしたって事に解釈出来るわよ？」

「そんな事じゃない……って思う。……やっぱゴメン。今の俺は君の体が目当てなのかも知れないや。君を見ていると一緒にどこまでも快樂を求めていたって思つてしまう……。でも俺つて……こんなに淫乱だったつって感じだよ……ホント」

「ふふっ。私の体をそんなに気に入ってくれたなんて……昔の私だったらともかく今の私としてはとっても嬉しい事だわ。なんというか……私もう母親だし、女として一番輝いていた時期には指導者として振舞っていたから自分の事を考える余裕なんて無かったし……。仕方が無い事だったとは判つてても、今になつて思うと……やっぱりどこか空しいのよね……。とは言え、死に損なつた私が言える筋合いでは無いんだけど……貴方にも振られる訳よね……」

「振つただなんて……確かに結果から言えばそんな感じだけど……あの頃の俺はまだ子供だったから恋愛なんて考えてもいなかっただけで……今なら君に良い答えをしてあげられるんだけどな……」

「ふふっ。貴方が私に対しての気持ちの本気だつて事は充分判つてるわ。でもその答えはこの前会つた時

にお互い話し合って納得した筈よ。私には永遠に主従関係を結んだ人がいる限り、貴方とは付き合う事……更に言えば結婚する事は出来ないって……。それに貴方って確か今は幼なじみと付き合ってたんじゃないかって？以前会った時にまた連絡取り始めたって話してたし……。相手の娘もジュドーの事好きなんですよ？あれからしばらく経ってるし……。まだ健全な関係……。なんて事は無いわよね？」

その言葉にジュドーは少し困惑した表情で答えた。

「えっ？それってたぶんエルの事……。だと思っただけど、俺から付き合ってた欲しいってはまだ言っていないし、向こうから言われても無いんだけど……。それに彼女……。付き合ってた俺の友達……。ビーチャって言うんだけどね……。事をまだ引きずってるみたいだし……」

「でも、もう何回もセックスとかはしたんでしょ？」

「そりゃ……。まあ……。ね……」

「健全なセックスだけ？それとも私としての様なアブノーマルなセックスとかも？ハードな事は？」

ハマーンは少し意地悪な気持ちでジュドーに問いかけた。

「……。なんだか恥ずかしい……。俺の心を覗いたのなら判ってるでしょ？やっぱ言わないとダメ？」

「ふふっ。そうやって私を散々弄んでる人が、今更恥ずかしがる訳？何だったら、また能力で心の中を更に覗いてもいいんだけど……？」

「あ……。それは……。うん……。えっと……。まあ、エルとは最初普通にセックスをしてたんだけど、お互いそういう事が好きだから色々な体位を試してみたり、何時間やり続けられるかとか試したりしたかな。でもやっぱ何度もやっているとマンネリになってきて……。もっと刺激が欲しいという事で自然と道具を使っ

たり、人のいない場所でやったりとか……そんな程度なんだけど……。やっぱセックスの事って言わせるのは興奮するけど人に言うのはとっても恥ずかしいね……」

「ふふつ。まだ縄とか剃毛とか浣腸とかハードな事はやってないのかしら？ 私には喜んでやるくせに？」

ハマーンがニヤニヤしながら言った。

「それはその……ゆっくり時間をかけて楽しまないと……ね。急にやって恐怖感を植え付けても困るしさ」

「ふくん。私にはスカとか飲尿とかも強要する関係なのにね……」

「俺に有無を言わず強要させた本人がよく言うよ。それにそういう関係になったのって再会してからじゃん」

「そうだけど、でも一体どの辺でエスカレートしちゃったのかしら……ね？」

「……俺に言わせれば最初から……かな？最初に君が俺を責めた時、君にペニスをしごかれては何度も寸止めされて、そのまま浣腸された上に首輪と頭に君の下着を被せられて廊下に出されて羞恥プレイを受けたんだけど……やったの覚えてる？」

「私達って最初からそんなにハードなプレイしてたかしら？」

「あの時の俺って性欲が溜まって、商売女でも買って……と思ってた時だったから、君に結構ハードなプレイを強要したんだよね。それでそのお礼に思って受けたんだけど……」

「ああ、そうそう。思い出したわ。そうしたら予想以上に私に変態だった……と言う訳ね？」

「そうなんだよね。で、廊下に出されてさらし者になってる間、浣腸の苦しさから気を紛らわせようとペ

ニスをしごいてただけで、その時顔に被された君の下着のオシッコとオリモノの匂いを嗅いでいたら……もう俺の中で理性がぶっ飛んでしまつて……それからはもうあの快感が忘れられなくて……」

「ふくん。それがもうずっと尾を引いてるといふのね」

「そう……なんだよね……」

「実際、あの頃も普通のセックスは勿論してたけど、すぐに野外とかでもやってたわよね。夜中の人気が無い公園でお互い全裸に縄がけして、犬の首輪を付けて散歩し合つたりとか……」

「途中何回もマーキングさせられたりとかね……君はオシッコだからまだいいけど、俺なんかオシッコの他にミルクを絞り出せとか何度も言われて泣きながら『出来ません』って言つたりしてたっけ」

「あつ、そうだったわね。仕方が無いから私の下着をおかずしたり、私の下半身を舐めさせて発射させてたような記憶があるけど……」

「うん。あつたあつた」

「今思うと、結構激しい事してたのよね。私達……。よく人に見付からなかったと思うわ」

「一回かなりまずい事あつたもんね」

「でもあの時はその人達も同じ趣味だったみたいで、私達にお関係が羨ましいとか言つて去つて行ったから助かつたけど……」

「それだけ親密な関係に見えたつて事じゃ無いかな？ たぶん」

「そう？……私のご主人様のシヤアに比べたら……まだまだだと思ふけど？ あとアムロとか……」

「その二人と比べられちゃ……人生経験と女性経験分位割り引いて比較して欲しいな」

「でも私……ジュドーからは『あんたの存在そのものが鬱陶しい！』って言われてるのよね。正直あの頃の私でも結構……というか……かなり傷付いたんだけど……。冷酷に見えたかも知れないけど一応私も女性なのよ……」

ハマーンがジュドーの頬を撫でながら、少し嫌みっぽく言った。

「それはその……何度も言うけど、あの頃はまだ女性の事を全く知らなかった……というか興味が無かったし、ましてや君は敵だった訳だから……と言う事で……御免なさい！」

「ふふつ。ちよつとからかってみただけだから……。でも私も一回位ジュドーにその言葉を言ってみてもいいかしら？ そうすればもう二度と言わないし、からかったりしないわ」

「君がそれで良いんだったら……」

「そう？ じゃあ……」

そう言うとハマーンは一呼吸整えると視線をきつくし、アクシズで指導者として振る舞っていた頃のような雰囲気醸し出し、ジュドーの太ももの上にまたがり彼と彼のペニスを見下ろして嫌悪感満載な表情を作りながらこう言い放った。

「ジュドー。お前はあの時本当に酷い事を言ったものだな。あの時のお前は歳の割には強くて頼もしい男に見えたが、今のお前は股間を固くするただの変態なマゾ男そのものだよ。かつての英雄も時が経てば他の男共と同じく性欲しか能が無いただの淫乱な俗物に成り下がって……本当にお前には失望したよ。ジュドー・アーシタ。……どうした？ 私の股間にお前のペニスを入れたくてたまらないんだろう？ この俗物が！……お前……もう私の中で果てたくてたまらないという顔をしているぞ。本当に存在そのものが

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

鬱陶しい男が！私の中に入れていいなんて百年早いわ！今から私が手伝ってやるからお前のミルクを私に見せるがいい！」

ハマーンはそう叫ぶと左手の指を彼の肛門の中に入れて前立腺を刺激しながら、右手で彼のペニスを軽く数回平手打ちをすると、ジュドーがうめき声を上げると共に下半身（というか前立腺辺り）に痙攣を起こしてペニスからミルクがドクドクと溢れてきた。いわゆる『トコロテン』である。ハマーンはそれを数回繰り返した後、ジュドーが苦しさと快楽で息を荒らげる※見つつ、うっとりとした表情でペニスから溢れ出ているミルクを舐め回し、口に含み、飲み干した。そしてまだ勃起し続けているペニスに、ハマーンは自分の前の穴をそっと重ねて腰を下ろした。その瞬間、下半身への圧迫感とそれに伴う快楽、そしてとても満ち足りた気持ちになった為か、思わず声を出してしまうハマーン。

「ああっ……ジュドー……気持ち……いい」

「ハマーン。俺も……。君がとても愛しく感じる……」

自分の上で何度も腰を振るハマーンに合わせて、ジュドーもペニスを突き上げた。しばらくそんな時間が続き、やがて軽く昇天するハマーン。ジュドーもそれに呼応して何度目かのミルクを射精した。

「ああっ、イクッ！……」

全身を震わせて昇天し、肩で息をするハマーン。

「はあ……はあ……」

「大丈夫？」

「ええ……平気。私の股間がジュドーのペニスに馴染んで……んっ……何というか包み込む感じどうねっ

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

てるの……とつても気持ちいい……」

「ああ、俺も……君の中でペニスに何かが絡みついてくる感じがとつても気持ちいいよ……俺が腰を突き上げるとそれに反応して……」

「もう……イキそう？」

「まだ……大丈夫そう。それに美人な顔が恥ずかしさと快楽で赤く染まって、艶のある体が汗で光って……こんな最高の女性を今。世界で俺が独り占めしてるんだからさ……。もつともつと長く楽しんでいたいんだ……俺」

「こんなおばさんでも……いいの？」

「勿論……というかまだまだ若くて素敵だよ。ハマーン。君と付き合えない……セックスフレンドにしかなれない自分が本当に悔しい。やつと君を認める事が出来て、俺も責任が取れる位に成長したって言うのに……本当に世の中って上手くいかないもんだね……」

そう答えたジュドーに、ハマーンは急に動きを止め、乳首とラビアに装着していたピアスを外した。

「えっ？ど、どうしたの？」

「えっ？ああ……このピアスは私がシャアとの主従関係を誓い合った時に、その証として付けたモノってのは知ってるわよね？」

「ああ……そう聞いてるけど……」

「勿論これを外したからってそれが解消する訳では無いけど……私を本気で愛してくれる人が目の前にいるのだから、私もそれに答える……今の私……アルテイシア……いえ、ハマーン・カーンは、ジュ

ドー・アーシタ……貴方だけの……女……です」

恥ずかしそうに視線をそらすハマーン。そしてジュードーの胸にもたれ掛かり激しく唇を重ねた。その際結合していた部分が外れたが、二人はその事を忘れたかのようにお互いの体を触り合い、性欲の赴くまま求め合った。時折、ハマーンが体のあちこちを舐められたり、乳首を甘噛みされたりして軽く絶頂感を覚えたりしたが、それが彼女の心も激しく燃え上がらせ、そしてまたジュードーの興奮を増大させた。彼はハマーンの胸、脇、腰、お腹と丹念に舐め回し、太ももから彼女の股間へと舌を這わした。その快樂に酔いながらも、ハマーンが言った。

「あつ……そこは……気持ち良いけど……さつきジュードーが出したミルクが残ってるから……」

「大丈夫、確かに俺のミルクの匂いと味がするけど、君の愛液と混ざってるし興奮してるからそんなに気にならないって。それにさ、幾ら慣れないとは言っても、以前君とプレイした時に散々飲まされた訳だからね」

「そう……あんっ……だったかしら……?」

「覚えてないの?俺を縛って身動き取れない様にして腰を高く上げてペニスの先が口の真上になる様な格好でよく射精させられてたつてのにさ……。口を開けてミルクを飲まないとおしおきとしてそのままの格好で浣腸されるからって、俺、心の中で泣きながらミルクを飲み込んでたんだぜ」

「そうだった……わね」

「ああ、で、結局数える程しか縄は解いてもらえなくて、そのまま浣腸、排泄の羞恥プレイからアナル責めや拡張プレイへと進んでいくんだもの。俺が幾ら勘弁して下さいって泣きながら懇願してもお構いなし

に責められてたよ。もつとも、自分のミルクや君のオシッコを何度も飲まされたり、自分の排泄物を手で片付ける事を何度も命令されてたら……いつの間にか心の何かが吹っ切れて……それと入れ替わる様にどんどん前立腺で感じる様になってきて……そうしたら射精しなくても何度も絶頂出来る様になっちまったりして……ホント良かったんだか悪かったんだか……」

「……後悔してる？」

ハマーンの申し訳なさそうな表情に、ジュードーは頬にキスをしてから答えた。

「どうして？君とこんな気持ち良い事を精根尽きるまで楽しめるんだから……全く後悔してないって。それに普通なら抱いて触り合って入れて射精したらそれで終わりなんだけど、君とのプレイだったら何度も絶頂感を味わえるし、一回射精してはい終わりという事も無くなったし、君の全ての穴と、僕の棒と全ての穴を全て使って何時間もお互い動けなくなるまで快楽をむさぼり合えるというのにかい？それに下品な話になるけど、俺、君の体もそうだけど、君の体から出るモノ全てが愛しいと思えるまで君に調教されてるんだぜ？後悔どころか俺をこんな体にした責任取って欲しい位さ。だから付き合えないのはホントに悲しいんだけど、君が望むならこれからも心を通わせる仲、そして最高のセックスフレンドとして関係を続けて欲しい……ダメかな？」

そういつつも、ジュードーの表情はとても優しかった。

「判ったわ。ジュードー。そろそろ……中で……出して……ジュードー……」

「じゃ……入れるよ」

正常位で足を開いて待つハマーンに、ジュードーはそつとペニスを彼女の秘部にあてがい、中に入るのを

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

確認すると、一気に根元まで入れた。そして右手でハマーンの左乳首を軽く撫でた。

「ああっ！感じる！！あんっ！」

その行為に、軽く絶頂を迎えるハマーン。そしてハマーンが一息付いた所を見計らって、ジュドーは彼女の腰に手をやり、正常位で何度目かのセックスを楽しみ、快楽をむさぼり合った。

「ハマーン。好きだよ。とつても……」

「ジュドー。私も。今、気持ち良くなって、とつても幸せよ」

「俺も……ペニスに君の肉ヒダが絡み付いてきて……頭の中が真っ白になりそう……。あつ……。君に体を触られるだけでとつても感じる……。凄い……」

「私も……。全身が性器になったみたい……。あんっ！……」

そんな行為をしばらく続けていたのだが、やがてお互いのニュータイプ能力が干渉し合い、相手の快楽に自分の快楽が加わり更にそれが相手に伝わり増幅されて……。と、無限に増幅されていくのだった。あまりの快楽に二人はまるで獣の様に交わり合った。そして、ジュドーが耐えきれない様な声で叫んだ。

「ハマーン！俺……。もうっ！……」

「いいわ。きてっ！一緒に！」

「ああっ！いくよっ！」

「ああっ！イクウウウウウウ！……！」

「ああっ！……！！！」

ジュドーのピストン一層運動が激しくなり、ハマーンを力強く抱きしめた瞬間、彼のペニスからミルク

がハマーンの中にドクドクと射精された。絶頂を迎え、快樂の結果故の痙攣を起こしている二人。そしてどちらからとも無く、力が抜け激しい息遣いと共にベッドへ深く沈み込むのだった。激しい快樂の余り、目をつむりながら激しい息遣いをしているハマーンに、ジュードーは優しく唇を重ねた。射精行為そのものはすでに終わっていたのだが、彼はまだハマーンとの一体感を味わっていたかったらしく、ペニスを抜こうとはしなかった。目を開けて、とても愛しい表情のハマーンがジュードーに優しく囁いた。

「ジュードー……。貴方、本当にいい男になったわね……。素敵よ……」

「それは俺本人……。ジュードー・アーシタとしての人間性の事かい？それとも今君の中に入っている下半身のコレの事かい？」

「どっちも素敵よ。貴方を人生のパートナーに出来る女性は本当に幸せ者ね」

その言葉に、ジュードーはハマーンの上に覆い被さったまま、真剣な表情で言い放った。

「じゃあ、なんで……。なんで俺と一緒に生きたいって言ってくれないんだよ！俺、こんなに年月が経ってしまったけど、やつと、やつと君の心が理解出来て……。分かり合えたと思ってるのに……。冗談とか同情とかじゃ無くて本気で思ってるのに……。本気で君の事……。好きになってきてるのに……。もう自分を偽る必要なんて無いんだろう？自由に生きる事が出来るんだろう？」

ジュードーの目から涙が溢れ出て、それがハマーンの頬に落ちた。彼女はそれを手で触ると、優しく自分の肌に沿わせて薄く延ばし、その行為をぼんやりと見つめながら言った。

「ジュードー……。貴方の気持ちは本当に嬉しいわ……。こんな気持ちになったのは……。貴方と戦って負けた後、シヤアが助けに来てくれて……。私がそれまで全てを心の底に仕舞い込んで……。指導者としての仮

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

面を付けて生きてきた事……そしてそれに自分が協力する事が出来なかった事を……すまないと言ってくれた……あの時以来……いえ、それ以上に嬉しいかも……」

「ハマーン……」

ジュドーの安堵の表情とは反対に、ハマーンは急に険しい表情になり、言葉使いも指導者の時の様な感じで言い放った。

「ジュドー。確かに私はお前の様な男は心の底から好きだし、時には甘えて肌を重ねたいという俗物的な心も持ち合わせてはいる。だが、何度も言うが私はシヤアと主従関係を結んでいるし、それは彼が居なくなったからといって解約出来るモノでも無いのだ。それ位私は彼の事を想い……愛している。そんな女と一緒に時を歩んでみる。お前は一生シヤアと比べられてしまう事になるのだぞ。それも永遠に超えられない相手とな……」

「そんなの……やってみなければ判らないだろ！」

「ジュドー。お前が本当に幸せにしなければならぬ女性は、ジオンの亡霊に捕らわれ翻弄された女性では無く、お前を慕っている幼なじみの女性の方だよ。私はセックスの時にお前の思念が私の頭の中に入ってきて、その娘の事を少なからず慕っている事が良く判った……いや判ってしまったからな……。だが体は私の心と関係なく疼いてしまう……」

ハマーンはそこまで言うと、自分がいかに俗物的な発言をしているかに気付き、何とも言えない様な表情を浮かべた。ジュドーは相変わらず泣いていたが、目はしっかりとハマーンを見つめていた。そしてどの位時間が経っただろうか。ジュドーのペニスはまだ小さくなりハマーンの中から抜け、彼女の股間から

はジュドーのミルクと彼女の愛液は布団のシーツに垂れて染みを作っていた。

「ちよつとシャワーを浴びてくるわ。汗で気持ちが悪いから……」

ハマーンはそう言うと、彼女の上から横に移動したジュドーを見つつバスルームへ歩もうとしてベッドから降りた。その時一瞬ジュドーと目が合った。彼女は本当に自分を心配している彼に惹かれている事も充分判っていた。ほんの一瞬の間に様々な事を考えた末、ハマーンは彼にこんな言葉をかけた。

「一緒に……来て……。まだ……語り足りないから……」

そつと彼の手を引くハマーン。その行動に若干戸惑いながらも安堵の表情を浮かべるジュドーだった。

*

*

*

二人は、どちらからともなくシャワーを掛け合い、汗と精液、そして愛液を洗い流した。その後、自然と口付けを交わし、ハマーンがお湯をお湯を出したままシャワーヘッドを高い位置に戻した後、二人は立っただけのままお互いの体をまさぐり合った。その最中にジュドーが言った。

「語り合うんじゃ……無かった……んっ……の……?」

その言葉の最中に、ハマーンはしゃがみ込んでジュドーのペニスを愛しそうにしゃぶりながら答えた。

「私達ニュータイプは、語り合うのは言葉だけじゃ無いでしょ?むしろ言葉や感情が障害になる場合の方が多くなくて?ジュドー?」

「それは……あつ……そうだけど……俺、心を通じ合わせて君の心の中を覗いてしまうのにどうしても抵抗があつて……。あつ、俺の心の中なんてのは、君にならもう自由に覗いてもらってもいいんだけどさ。今まで君の前で晒した痴態に比べれば、俺の性癖とか、変な癖や日常生活を覗かれる事なんて平気つても

んだよ。それと、俺は好きな人に言葉で『好きだよ』『愛してるよ』って言うのは何度言っても心が嬉しいって感じがするし……」

「ふふっ。確かにそうね。お互いの気持ちが通じ合っている、声に出して言ってもらった方が嬉しいものね」

「じゃあ、俺が君の事を『好きだよ。ハマーン』って言うのは？」

その言葉に、彼女はペニスをしゃぶるのを一端やめて、少し恥ずかしそうな表情で答えた。

「嫌な訳……ないじゃないの……。う……嬉しいわよ」

そう言うのと、ハマーンは再びペニスを丹念に舐め回した。ジュードーはその一連の仕草にとっても興奮し、それに比例して快感も上昇していった。そしてジュードーの表情が徐々にこわばり、ペニスの先から何度目かのミルクが吹き出した。ハマーンはそれを全て口で受け止めて、当然の様に飲み込んだ。絶頂感からの筋肉の痙攣が終わり、満足し切った表情で呼吸を整えているジュードーに対して、ハマーンが優しい目を見ながら言った。

「本題に入るけど……ベッドで私と共に生きていって言ってくれたのは……本気なの？」

「ああ……嘘やその場の勢いで言ったなら、それは君に対して失礼だし、第一それが嘘だったら君にはすぐに見破られるだろうし、第一俺は生きてここから出られないかもしれないしね」

「……そうね。じゃあ、私はこれからも契約を交わしている以上、ずっと消息不明なシヤアの忠実な奴隷という立場なんだけど……そんな私でもいいっていう訳？」

「そんな事位、覚悟の上で言ってるんだぜ。何なら俺もシヤアの奴隷になって君と二人で公衆の面前で見

世物として公開セックスをしてもいいときえ思ってる。俺はそれ位の覚悟で言ったんだけど……」

「そういう事って……私はMだから大歓迎だし、考えるだけでとっても興奮してしまうけど、大好きな貴方をそこまで墮としたくは無いわ。……でも、そんな気持ちにさせるって……私のどこに惹かれてるの？ 私は間接的にだけ敵味方問わず大量に殺してきたわ。更に言えばコロニー落としすら実行した極悪人なのよ。それに貴方とは敵同士だった訳だし……」

「どうしてだい？なぜそんなに意固地になる！あの戦いの時、最後は自分を解放してたじゃないか！ハマーン！」

そう言うジュドーはハマーンと同じ目線になる様にしゃがみ込むと、いきなり押し倒して激しいキスをしながら、彼女の股間をまさぐった。シャーの音と共に、ハマーンをあえぎ声がバスルームに響き渡った。その行為を行いながらジュドーが言い放った。

「隠し通せないから言うけど君は今の俺として好きなタイプだし、そんな人にペニスでの快楽はおろか、前立腺や後ろの穴での快楽も色々教えてもらったからね。そのお陰で前立腺でのプレイでは頭が真っ白になるまで何度も昇天して体力の限界を通り越すって事も何度か経験したし、ペニスでのセックスも立たなくなるまで何度もミルクを射精する事が出来る様になったし……これって俺としては本当に嬉しいし満ち足りた気分になれるんだけど……勿論行為自体はお金で買った女性でも出来ない事は無いと想うけど……。でも、そういう快楽行為だけで君を気に入った訳じゃ無いんだ。もつとも、こんな事しながらじゃ信じて貰えないかもしれないけど……ね」

そう言いながら、ジュドーはハマーンの前の穴に指を三本入れ、手の平ではクリトリスをこする感じで

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

こねくり回した。その行為に思わず淫靡な声が漏れてしまうハマーン。

「ジュドー……あっ……ああん……うんっ……っ！」

「気持ちいい？」

「あっ……あ……恥ずかしい……」

「その表情を見れば判るけど、やっぱり声に出して言って欲しいな。判るよね？この気持ち？」

「あっ……気持ちいい……気持ち良すぎて……頭の中が……溶けてしまいそう……気持ちいい事以外は何も考えられない……。こんな自分を見られてると思うと……とつても恥ずかしいけど……それを思うだけで感じてしまう……ああんっ！」

頬を真っ赤に染めて、軽い絶頂感を迎えるハマーンその光景を見て、ペニスが反り返る位に勃起したジュドーは、彼女をバスルームの壁に両手を付く様に促した後、後ろから彼女の前の穴にゆっくりと挿入した。その行為に、思わず声を上げるハマーン。

「ああっ！入っ……た。ジュドーのペニスが私の中に……」

「今日はこれで何度目の合体に……なるのかな？ハマーン？」

「4……5回目か……ああっ！5回目……よね」

「5回目だね。しかし、俺もしばらくご無沙汰だったとは言え、よくこんなに出来るなあ……って思っちゃうよ。ルーは淡泊だったから週に2回も出来ればラッキーだったし、エルも毎日する位好きモノだけどそれでも一日3回位でお互い満足してんだけどね……」

「私の体との相性が良いって事かしら？それとも……あんっ……単に貴方が淫乱なだけなのかしら？」

それを聞くと、ジュドーは一端ペニスを抜くと、ハマーンを膝立ちの状態にして、手を後ろに差し出す様にして、顔をバスルームの床に付ける様な格好にした。そして彼女の両手をまるで馬の手綱を握る様に掴むと、再びペニスを彼女の前の穴に挿入し、今度は激しく突きまくった。

「ああっ！ああああっ！感じる！感じちゃう！ジュドーのペニスが……私の中で擦れてる……気持ちいいっ！」

「ふふっ。ネオ・ジオンで指導者として振る舞っていた時は、あんなにお高くとまっていた癖にさ。今の君は俺のペニスでヨガリ狂っている淫乱で変態な上にマゾで一匹の発情してる雌犬そのものじゃいか？な？ハマーン？」

「ああっ！そんな……そんな事……」

「自分でも言ってたけど、人にそういう風に罵られる事が好きなんだよね？君は……？そうだろ？」

「あっ！ああ……そうなの……あの頃の反動で……人に俗物と蔑まれるのがとっても感じるの……私……ハマーンは……こんな所まで堕ちてしまったって思うと……股間や子宮が疼いて…… たまらないの！ジュドー……お願いだから私の中にありったけのミルクを発射して、私の心の渴きを埋めて！前の穴は勿論、貴方が望むなら口でも、後ろの穴でも自由に使って良いから……お願い！」

「君にそんな事言われたから……俺のペニス……更に固くなっちゃったよ。じゃあ……今日はお互い足腰立たなくなるまでやりまくるから……覚悟しといてね！」

「ああっ……嬉しい……あっ……あう！イキそう……」

「俺も……もう少しでイキそうだ……」

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

「一緒に……ああっ！」

ジュードーの腰の動きが激しくなり、やがて彼がこう叫んだ。

「イクよ！ハマーン！」

「私も……イクウウウウウウ！」

「アアアツツ！……！」

絶頂感を迎え、痙攣し合う二人。そしてハマーンからペニスを抜いたジュードーは、シャワーの水が降り注ぐ中、満足そうな表情をしたまま尻を突き上げた状態で動かずにいたハマーンの脇に寝そべると、彼女を抱き寄せて濃厚なキスを交わした。その最中、一瞬お互いの目が合ったが、その後二人は目をつむりバスルームの床に寝そべりながらお互いの体をまさぐり合った。

*

*

*

それなりの余韻を楽しんだ二人はバスタブにお湯を貯め、ジュードーが下にハマーンがその上と言う様な状態で浸かった。楽しく何気ない会話をする二人だったが、ジュードーはその合間にハマーンの胸を揉んだり、乳首を軽くつまんだりした。すると刺激に敏感になっているハマーンは、軽くあえぎ声を上げたのだが、それがまたジュードーにはたまらなく思えた。

「ジュードー……貴方って本当に性欲が旺盛なのね」

「そうでもないって。相手が君だからこんなに興奮するんだし、何回でもセックスしたいんだと思うんだけどね」

「本当に？」

「ああ、元エウーゴのパイロットとネオ・ジオンの指導者との禁断のセックス……それもハードなプレイまでやりまくりだなんて、考えただけで興奮すると思わない？」

「それ……私が自分を蔑んだり、野外で露出やらオナニーをしてこれが見付かったら……って思うと興奮するのと同じ事かしら？」

「たぶんね。でも、君がとっても魅力的な女性なんだって事が判ったってのが一番大きいと思う。だからこそ君がとても愛しく思えて、何度もペニスが勃起してしまっくんじやないかなと思うけど……ね」

「ふふつ。ありがとう。今更だけど、ジュードーにそう言って貰えて嬉しいわ」

ハマーンはそう言うと、ジュードーの耳元を軽く舐めた後、そつと耳を甘噛みした。そしてこう囁くのがあった。

「でも、私がやった事……あなたは否定してた筈よ。いつごろからなのかしら？ そう思ったのは……」

その言葉に、ジュードーは心を一端整理してから話し始めた。

「俺、木星へ行っちゃって話したと思うんだけど、道中なんて結構暇でやる事と言えば趣味に没頭したり、男女のセックスがメインなんだけど、ルーがそういうの淡泊でさ……結局一人で色々考える事が多くてさ。あの頃の仲間の事とか、エウーゴや地球連邦の事とか、ネオ・ジオンの事とか……」

「それは興味がある話だ。是非聞かせてもらいたいものだな」

その指導者時代のハマーンの言い方に、ジュードーは苦笑いをしながら言った。

「君って、時々昔の口調になるよね。昔はともかく、今はそういう言い方も興奮するけどさ」

「ふふ、この方が雰囲気が出るかと思ってな……ダメか？」

「いや、むしろそういう感じで言ってくれた方が、俺のペニスの回復も早いかもよ」

「そうか……ならこの口調で話してやるよ。貴様の俗物ペニスが復活するまでの間だけだがな。それで、考えた末の結論はどうだったのだ？」

「ああ……まずマシユマーやキャラ達が俺達のコロニーへ来た時は、今思えば実質占領下だというのにそれ程酷い扱いを受けなかったなという事に気付いた。それとアクシズがネオ・ジオンと名を変えて地球圏へ降下してダカールを占領したのも、殆ど双方の損害を出さずに事を進めて、サイド3を交渉の末に奪還しただろ？ あんな事は今までも、そしてこれからも誰も出来ないと思うんだ」

「……」

「それと、君たちが今でも非難されているダブリンへのコロニー落としたって、地球側の被害はそりゃ大きいし、避難しようとした民間人が乗る輸送機を攻撃した事は弁解の余地が無いとは思うけど……」

「思うけど……？」

「あの作戦は事前にネオ・ジオン側が俺たちに攻撃を受けたという事で停戦協定を破棄されたとみなしてその報復としてコロニーをダブリンへ落とすと事前に通告していたって聞いた。それに連邦側もその事は把握していた筈なんだ。でもその情報を握りつぶして地球の人減らしの手段として使った……。民間人を避難させたりは一切しなかったという……それって結果的にはネオ・ジオンの作戦に協力したのと同じじゃ無いのか！……ってね」

「……」

「更に言えば、そのコロニー落としに関してだって、あんなもんが宇宙から落下してあの程度の衝撃で済

んだというのが色々な人に話を聞くと決まって『通常はあり得ない』という結論になるんだ。そりゃ、同じコロニー落としに逢ったオーストラリアの惨状と比べて見れば、小難しい理論で説明しなくても誰だって納得するだろうけどさ。……と言う事は、被害を最小限にする為の仕掛け……落下速度を制御する装置かなんかをコロニーに取り付けていたんじゃないかって事さ。で、本当の所はどうなんだい？ハマーン」

「中々……面白い考察だな。だけど、仮にそれをやったとしてネオ・ジオン側に何のメリットがあるというのだ？」

「それは……あんたが一番良く判ってるんじゃないかな？……あれは地球連邦側の反抗の牙を削ぐ為の最低限の『犠牲』が必要だった……という事なんじゃないのかい？だって、それで長年続いた不毛な戦争が終わるなら、それに超した事はないってのも良いか悪いかは別にして……方法論としては有りだからね。……もつとも死んだ人達にしてみればたまったもんじゃないんだけど……少なくとも君はその苦しみ……そして後々まで残る怨嗟の念を一人で背負う覚悟でいたんじゃないかな」

その言葉にハマーンの表情が少し緩んだ。そしてこう言った。

「ふふっ……正解だよ。ジュドー・アークタ。あの時、私の頭の中には、無数の死んでいった者達の断末魔の思念が頭の中を駆け巡り、死んだ方がましだとさえ思える程の苦しさだった。だが、後の世で私が何と言われようとも、戦争を早期に終わらせる為には、あの時点では最善の方法だったと今でも思っているよ。もつとも、連邦のバカ共はそれすら織り込み済みで協定を破棄して反攻してきたのだがな。それはともかくあの時コロニーに落下速度を制御する装置を付けた為、かなりの戦費をそちらに回した為に、軍備や他の組織への根回しの資金が疎かになってしまったのも事実だ。それが内部での反乱の原因になった

とも言えるが……ふふっ。しかし……私の部下でも、そこまで把握してくれた人はいなかったというのに……。全く今のお前が当時の私の側にいてくれたら……と、しみじみ思うよ」

「……今でも気になる事があるんだけど……それも聞いてもいいかな？」

「何だ？今の私なら何でも答えるぞ」

「ネオ・ジオン……いや、アクシズは一体どんな考えで地球圏へ戻って来たんだい？地球圏へ戻って来て連邦軍と戦う為にはそれ相応の勝算が無ければダメだと思っただけ……。ましてや、君が全くの無策でという事は無いと思っただけ……」

ジュードーの言葉に、ハマーンの表情が和らいだ。

「確かに……その通りだよ。ジュードー・アーシタ。戦力的に劣るモノが戦いを挑む為には、時期と策略が必要なのは判ると思う。あの頃、地球圏では連邦軍はティターンズとエウーゴが台頭し、指揮系統の混乱が生じていた。それと我々の精神状態を考慮して地球圏へ戻るのはその時を置いて他に無いと言う事になった。これが時期への回答だ。そして策略だが、我々は地球圏へアクシズを移動させる際、事前にある男を地球圏へ行かせ、アナハイム・エレクトロニクスとパイプを繋ぐ役目や、地球圏の反連邦組織とのコンタクトを取り、賛同を得て貰うという作戦を託した……答だった」

「答？どういう事？」

「判りやすく言えば……我々には敵側へ潜入したと見せかけて、実際には機密書類を敵側へ提供して寝返っていた……という訳さ」

「酷い奴だな。誰なんだい？」

「ふふ…お前も知っている…：…シヤア・アズナブルだよ」

「シヤアって…：…ハマーン…：…君の…：…」

「そう。主従関係の契りを結んだ御主人様だな。その結果お互い敵対し合わなければならぬ事になった訳だが、個人としては永遠に裏切れない関係という事で…：…あの頃の私はどうやったら全てを揉み消して丸く収める事が出来るか…：…そればかりを考えていたよ」

「辛くなかったかい？」

「私だって女だ。愛する人を脱走兵として拘束、軍法会議にかけて処刑する事はなんとしても阻止しなければならぬと必死になってたよ。それ故、戦闘中に何度も『戻って来い』と言ったのだが…：…その言葉は結局彼の耳には届かなかった…：…解り合えなかつた…：…哀しい結末だったよ」

ハマーンが寂しそうな表情になり、目から涙が溢れてきた。それを口で舐め取るジュドー。

「でも、仮に戻って来たとしたら…：…どうするつもりだったんだい？」

「それまでの一連の行動は、全て敵への陽動作戦故の事として全てを不問にする予定だった。もちろん反論する者もいたとは思うが、カリスマ性がある彼が居なければ成り立たない組織であるが故に、そういう者を排除してでも成し遂げる予定だったさ。だが、グリップス戦で負傷した彼を偶然にも救助して保護し、その間何度も体を重ねながら説得したのだが…：…彼の意思を変える事は出来なかつた…：…。結局袂を分ける事になったけどな。…：…辛かった…：…それは本当に辛い決断だったよ…：…今思い出しても涙が出てくる位…：…」

ハマーンは、そっとジュドーに抱き付いた。そこに居るのはかつての指導者では無く、母親となった一

人の女性だった。そしてハマーンは更に話を続けた。

「そして私は彼が去った後、彼への未練を吹っ切る覚悟で彼が気に入ってくれた髪を切り、アクシズという組織をネオ・ジオンと命名した。そして私は連邦の戦力を少しでも削ぎ、強靱に見える地球連邦も実は一枚岩では無いという事を世の中に知らしめたかった……。更にその様な作戦を行いながら、組織内部の反乱分子をあぶり出して処理しなければならなかった。その為に戦力が大幅に弱体化してもな」

「なぜ……。そこまでしなければならなかったんだい？」

その言葉に対して、ハマーンは毅然とした表情で言い放った。

「ふっ、彼が立ち上がる時、邪魔者は一人でも少ない方がいいからな。私はそれまでの時間稼ぎの役に過ぎなかったという訳だ」

「あんた……。そんなにシヤアの事を想ってるのなら、なんで彼に付いて行かなかったんだよ」

「あの頃の私は……。組織を率いる公人となっていたからな。個人の考えを通す事は出来なかったんだよ。それに彼が私と主従関係の契りを結んだのも、脱走を計画する際に少しでもリスクを減らしておきたかったからだろうな」

「つまり……。追っ手の牙……。君を骨抜きにする為に利用したと……」

「そういう事だ」

「だったら……。そんな主従関係……。尚更無効でもいいじゃないかよ！あんたに何一つメリットが無い契約じゃないかよ！」

「そうかも知れない……。だが、彼はアステロイドベルトで絶望の底にいた時、利用する為とは言え一時

で私の前に道を作ってくれた男なのだ。そして私が権力を手中にした時、彼が自分の進む道で悩んでいるならば、今度は私が彼の前に道を作っておきたい……それだけなのだよ。私はその時の恩を忘れる程、傲慢では無いのでな」

哀しい笑顔を見せながら答えるハマーンを、ジュードーはギュツと抱きしめる事しか出来なかった。

「じゃあ、君が仲間割れを未然に防いで、もっと上手く立ち回って、シヤアにネオ・ジオンの全てを譲渡すれば良かっただけの話じゃないのか!？」

「それでは……シヤア本人としては面白くないだろうし、ネオ・ジオン自体内情を隠してかなり大げさに表現していたからな。やがて戦力の差が大き過ぎる事が知れ渡り、持久戦に持ち込まれれば確実に負ける事は目に見えていた。そんな組織を誰が譲り受けるというのだ?ジュードー・アーシタ?」

ハマーンは、ジュードーが自分の目を真剣な表情で見つめている事に気付いた。

「どうした?ジュードー?」

「いや、戦ってる時は判らなかつたけど……当時の君は色々なモノを背負いながら必死に生きていたんだなって……」

「その努力も、負けてしまつてはどうしようも無いモノさ。勝った者が歴史を作り、負けた者は永遠に消えない汚名を背負う……当たり前前の事だよ」

「……」

「でも、シヤアは彼の本心はともかく……お前との戦いの後私を救助して……私に感謝のねぎらいの言葉をかけてくれた。アムロだつてジオンをそれなりに理解はしてくれていた。そしてジュードー……お前も

私の事を許さないまでも認めてくれた。それだけでも私のやってきた事は無駄では無かった…と思うよ」

「ハマーン……」

「それに、今は息子のハリーがいる。私は彼を育てる事が出来るだけで充分幸せなのだ。お前も人の親になれば判るよ……たぶん……な」

「……」

「さ、戯れの時間は終わりにしよう。大丈夫か？」

「あ？ああ、充分休んだ事だし、今一番君を幸せ……というか快樂の中に堕とす事が出来るのは俺なんだから、この幸せをもっと楽しまないとね。だろう？」

そうジュードーが答えると、いつもの優しい声に戻ったハマーンが嬉しそうに言った。

「ジュードー。大好き！じゃあ、これからはノーマルなセックスでは無く、アブノーマルなプレイをしたと思うんだけど……？ダメかしら？」

「ダメって……。嫌って言うてももうヤル事に決めてるんでしょ？で、どんなプレイがしたいの？」

その言葉に嬉しそうに応えるハマーン。

「そうねえ……私がジュードーの肛門を責めるプレイと、ジュードーが私の肛門を責めるプレイ……どっちがいい？」

「どっちも後ろの穴だよ！で、当然浣腸や排泄とかの羞恥プレイもするんでしょ？」

「当然よ。やるからにはそういう事も含めて徹底的に楽しまなきゃ面白く無いわ」

「はいはい。まあ、自分の排泄物や君の排泄物なら、何度も手で処理する様に調教されたのもう慣れた

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

けど……というか最近そういうプレイ多くない？」

その言葉を聞いた瞬間、ハマーンの心の中に、淫乱なドロツとしたものが流れた様な気がして、頬を赤く染めた。

「どうしたの？ハマーン？」

「え？あつ？……ジュドーの気持ち想像してたら疼いちゃって……軽くイキたくなって……」

そう答えると、クリトリスを軽く擦りながら、ブルツと震えて軽い絶頂を迎えるハマーン。

「はあ……」

「イッた？」

「はい……」

「気持ちよかった？」

「は……いい」

頬が真っ赤になるハマーン。

「もつと気持ちいい事……したい？」

「は……はい。ジュドーと責めたり責められたりし合って、『果ての先』を一緒に見たい……です」

『果ての先』ねえ……あれってホント気持ちいいけど酸欠で頭が真っ白になる感じだからとっても疲れるんだよね。それも一回じゃ済まないでしょ」

「もちろん……どちらか意識が飛ぶまで果てしなく……快樂を追い求めたい……です」

「何というか、以前会った時よりも遙かに淫乱になってるけど、誰かに調教された？」

「その……私の義理の姉にあたるセイラ義姉さんに……」

Mの声から普通の声に戻り、恥ずかしそうに答えるハマーン。

「セイラって……あのセイラさんでしょ？」

「ええ。ジュドーの事も知ってるって言ってたけど……」

「ああ、あの人はリイナ……俺の妹の命の恩人なんだ。何回か合った事があるけど……あの人もセックスとそういうプレイが好きなんだ」

「ええ、私とは逆にMもこなせるけども、根はハードなSで、一年戦争時代はアムロをM奴隷同然に調教してたらしいわよ」

「へえ、アムロさんってMなんだ」

「私も彼の事は知ってるけど……そんな感じには思えなかったな……。あつ、そうそう。セイラ義姉さんに私が最近ジュドーと再び会って……その……肉体関係になってるって事を言ったんだけど……」

「言っちゃったんだ!？」

「仕方が無かったのよ。身動き捕れない状態で、前の穴と後ろの穴を何時間も責められて何度もイカされてた時に貴方の事が頭に浮かんで……それを問い詰められたから……。『セイラ義姉さんの頭の中に浮かんだ私とセックスしている男性はジュドーです』って……」

「まあ……状況的には……仕方ないかな……。で？そんな人だったら当然それだけじゃ無いよね？」

「ええ。『私もジュドーとセックスしたいわ。いいでしょ?』という事を満面の笑顔で言ってきて、ジュドーと会えそうな日程……私とジュドーが会ってセックスする日を教えなさいって……。今日はさすが

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

にジュドーの返事を聞いて無いからって……だから私に聞いておいてねって……」

「ちよつと待って。俺と君がセックスする日を教えてって、それってその日は当然セイラさんともセックスするよね？と、言う事は俺、二人の女性とセックスするの？それも底なしの性欲の塊の様な二人相手に……？」

「そういう事に……なると思うわ。あとたぶん3Pも当然の事のようにやるでしょうし、私がやる以上のハードなプレイも覚悟しておいた方がいいかもね……。無理そう？セイラ義姉さんは無理強いなセックスはしないわって言ってたけど……」

ハマーンはとつても申し訳なさそうな表情で聞いてきた。ジュドーはそんな彼女を自分の方へ向き尚させてから抱き締めると、軽くキスをした後にこう答えた。

「美人二人と死ぬ位のセックスが出来るんだから、これを嫌だって断ったら、世の中全ての男を敵に回す事になっちゃうまう。喜んで……とは言えないかも知れないけどお相手する……いやさせて頂くよ」

「判った。伝えとくわね。じゃあその日は体力と精力の付く料理や飲み物を沢山用意して待ってるわ」

「ああ、頼むよ。さて、体力が回復してきた所で続きをやると思いますか。そう言えば君ってシヤアの子供がいるから、セイラさんは年上でも義理の妹になるんじゃないのかい？」

「普通ならそうなるとは思うんだけど……私はシヤアと籍を入れた訳じゃ無いし、私の中ではマレーネ姉さんとはまた別な次元で憧れの姉という感じだったから……あえて義姉さんって言わせてもらってるの」「へー。そういう事だったのね。ちなみにセイラさんとはどんなハードなプレイしてるんだい？すっごく興味あるんだけど……」

「あ……何とか、浣腸してしばらくアナルに栓をして我慢するんだけど、その栓を抜いた際に直ぐ排泄させて貰えなくて……替わりにローション塗った極太 dildo でまた栓をするの。そうしてしゃがみ込みながらお尻を上下に動かしていると、一層排泄感がこみ上げてきて dildo と肛門の隙間から排泄物がニルニルと押し出されてきて……その刺激で何度も絶頂してる際にセイラ義姉さんはその排泄物を私の体中に塗りたくったり口の中へ入れてきたり、オシッコをしたくなったらそんな状態の私の口を便器代わりに使ったりと……そんなプレイ……かな？」

かなりのハードなプレイをさらりと言うハマーン。

「凄い……プレイだね……君の告白を聞いてるだけでペニスが勃起しちゃったよ」

そう言いながら股間を指差すジュードー。

「ジュードーも……私のそういう姿……好き？」

「そうだね……塗ったり食べたりはちよつと勘弁だけど、君の後ろの穴から排泄物が出てくるとか、その時の君の表情とかは何回かプレイして見てたけど……何とも言えない背徳な気持ちになるね。それにそんな光景を世界で俺が独り占め出来るなんて……考えただけでも興奮してくるってもんさ」

「ふふつ。そんな事面と向かって言われたのって……久しぶりだわ」

そう言うと、二人はバスタブから出て、バスルームの床に寝そべり濃厚なキスをしながらお互いの体を再びまさぐり合った。

「じゃあ、それをする前にもう一発……コイツを静かにしてからで……いいかな？」

「判ったわ。さっきの事を告白したら下半身が濡れてきて、ジュードーのペニスが欲しくてたまらなかった

の。お願い……入れて……そして私の中を強くかき回して！そして私の中に沢山……沢山のミルクを出して欲しい！それで……全てを出し切ってもまだ私の変態的な行為が見たいようだったら……その時は……」

「判った。じゃ……入れるよ」

正常位のまま、ジュードーはハマーンの前の穴に、一気にペニスを突き刺した。ハマーンの歓喜の音がバスルームに響き渡った。そしてそれはお互い隠語や恥ずかしい言葉を言い合いながら激しく交わり合い、やがてお互いが同じタイミングで絶頂を迎えてフィニッシュとなった。二人とも肩で息をする程の快感を得ていたが、火が付いた淫乱な炎はまだ消えようとはしなかった。すると一端バスルームから出て、裸のまま軽い食事をしながら、二人は時折お互いの体をまさぐりながら楽しそうに会話を始めた。まるで、以前から長い事付き合っているかのように……。

*

*

*

ジュードーは疲れの為ソファでいつの間にか寝てしまっていた。やがて何かの拍子に目を覚ますとハマーンが反対のソファに座りながら裸のままこちらをじっとみつめている姿が見えた。

「あ……起こしちゃったわね……。何回もミルクを出して疲れたみたいだからそっとしてただけ……御免なさいね」

「いや……そんな事はいいんだけど……一体どうしたの？」

「どうしたのって……単に貴方を見てただけなんだけど……嫌だったかしら？」

「そんな訳無いけど……。むしろこれからのプレイの事を考えるとまた興奮してきたんだけど……」

その言葉に、ハマーンは少し照れたような表情で答えた。

「私の事を気に入ってくれるのは嬉しいけど……無理しないでね」

「ああ、ありがとう。で、どういうプレイをしてくれるのかな？」

ジュードーの言葉にそのまましばらく考え込むハマーンだったが、やがて彼にこう告げた。

「じゃ、これからかなりハードなプレイをするけど……それを見て私の事……嫌いにならないでね。約束して……」

「ああ……判った。どんなに変態な姿を俺の前で晒しても、決して君を嫌いにならない。約束する」

その声を聞くと、ハマーンはそつとジュードーを抱き締めた。

「ありがとう……ジュードー……」

そう答えた後、ハマーンは愛しい恋人を見るような目をしながら、再び少し威厳を持ったような言い方で話し始めた。

「では、これから行う事は快樂地獄にのたうち回る子持ちの雌犬……まあ……私の事だが……をお前が見届けると言うプレイを行う事とする。いいか？」

そう言うときジュードーは自信たっぷりにこう言い放った。

「任せてよ。要は君が戦争の時に使っていたようなバイブやデイルドーよりも、俺のペニスで徹底的に君をイカせればいい訳だろう？ そんな事ならお安い御用だつて！」

「……それは確かに良い案だし、私もそういう状況の中でお前のペニスが私の中に入る事を考えただけで興奮するのだが、それでは当時の私がどんな感じで苦しみ、そして快樂地獄の中でのたうち回っているの

かが判らないだろう？なのでそれを……お前に見て貰いたい……嫌か？」

「要するに、君がハードなオナニーで昇天しまくっている所を鑑賞しろ……という事でいいのかな？」

その言葉に、ハマーンは頬を少し赤く染めながら言った。

「そうだ。恥ずかしい行為を愛しい人に見て頂くとするのは……Mの私にはこれ以上無いご褒美でもあるのだよ」

少し考えるジュードー。

「俺としては君と一つになって一緒に昇天し合うのが好きんだけど、君のオナニー姿なんてじっくりと見る事なんて無かったから……それもいいかもね。でも……君のそんな姿を見て俺が興奮して入れたくなくなってしまった時の責任までは取れないかもよ」

「ふふっ、上等だ。その時は口でも前の穴でも後ろの穴でも、好きな所を性器として使ってくれて構わんよ。」

そう言った直後、ハマーンは何かひらめいたらしく、顔を真っ赤にしながらジュードーの耳元でそっと囁いた。するとセックスに関しては割と平気に受け答えをするジュードーが、顔を真っ赤にして叫んだ。

「えっ！その提案自体は賛成なんだけど、もう結構ミルク出したから結構俺に不利なんだけど……！」

「私に勝てばお前の好きにしているという……たぶん二度と無い提案なのだが……。お前も辛いかもしれないが、私だって長時間連続で絶頂を迎えるというのはかなり辛いことなのだが……」

「でもさ。気持ち良い事がずっと続くんでしょ？」

「ふふっ。軽い刺激だったらそうかもしれないが……ハードなプレイだから……」

腑に落ちないジュードーにハマーンは更に話を続けた。

「人間が刺激を快楽と認識するというのは、実は限界があるのだよ。何というかある程度の快楽を得てしまうと、それ以上の強烈な刺激はもう苦痛以外何もでも無くなる。確かに昇天はするのだがな……。お前だってミルクを出した直後にペニスをしごかれるのは辛いだろう？それと同じ事だよ」

「ああ……。そういう事なら何となく判るかも。まあ……。何となくだけど」

そうジュードーが答えた時、ハマーンは今までの強がった言い方から、一転してしおらしい少女の様な表情に変化して、頬を赤らめながら言った。

「じゃ、よろしくね。ジュードー」

「判った。でもいいのかい？これで君が負けたら君は俺のモノになるんだぜ。奴隷としての契約を破ることになるんじゃないの？」

「そうね……。でもジュードーの告白に私も真剣に受け止めなきゃと思ったの……。それに負けると思ってた勝負を挑む人間なんていないわ。そうでしょ？」

「確かにね。でも君をモノに出来るチャンスなんだから……。手加減は一切しないからそのつもりでいてね」

「勿論……。でもそれってMの私にはご褒美になるかもよ。ふふっ」

そういうと、ハマーンはジュードーと唇を重ねた。舌を入れ合い、体をまさぐりあう激しいキスが、数分の間バスルームで繰り返された。そして一通りの営みを軽く終えようと、二人はこれからのプレイの道具を手配する為にホテルフロントへの電話やら、体力回復の為に食事やらと準備をし始めた。

「こんな感じで……いいんかな？」

「そうね……。もう少しきつく縛ってもいいわよ。縄が肌に食い込む位にギュツと……。どうしたの？ジュドー？」

「いや、何と言うか……。その……」

ジュドーはハマーンの指示通りに、彼女の体に縄がけをしていたのだが、胸や腰を不自由な姿になるまでに縛り上げるので、どうしても躊躇してしまうのだった。

「苦しくないかって心配してるのかしら？でも私のこんな姿なんて、もう何度も見てるじゃない……」

「そうなんだけど……。こんなに真面目に手伝ったのは初めてだし、いつもは興奮してるから……」

「ふふっ。私とこんな関係になってるといふのに……。優しいのね。でも、プレイ中に解ける様な緩い緊縛ではお互い興奮めしてしまうし、苦痛と快樂の中で体を動かしたくても動かせない方がとつても興奮するのよ。だから遠慮はしなくていいわ……」

「判った……」

「そう言いながらも、ペニスは大きくなってのね。そこは別人格なのかしら？」

「そりゃ……。こんな事して興奮しない方が……」

ジュドーはそう言いながら、彼女の体を少しきつめに緊縛し、バスルームに仰向けに寝かせた。その後M字開脚で太もも部分をきつちり縛った後、開いた脚を閉じる事が出来ない様に太もも部分と腹の部分の縄を合わせて結び、最後に両腕の肘の部分を体に沿わせて固定し、M字に開いた足の下を通し足首の内側

*

*

*

の部分に手首を沿わせしつかりと縛った。これでハマーンは、股を開いた格好のまま自分の力では絶対に脱出出来ない緊縛姿になった。縄による圧迫感の為か、ハマーンの呼吸が幾分荒くなっていた。

「終わったよ。ハマーン。どんな感じだい？」

「あ……もう自分では……絶対に抜け出せ無いわ……ね。これだけでもう感じてきてるし……。ジュードーこそこんな私を見てどう思うの？変態過ぎて軽蔑した？」

「ううん。全然。むしろこの姿を見てるだけで興奮するし、この姿を見ながら一回ミルクを出してみたい位だよ」

「なら、私に見せ付ける様な感じでオナニーしてくれるかしら？」

「そりゃ……断る理由なんて無いけど……どうしたの？」

「貴方が自分のペニスを擦って興奮している姿を見たいし、それにこのプレイが始まるとじっくり見ている余裕は無くなると思うから……」

「確かに……ね。……じゃ……」

そう言うとジュードーはハマーンの上に馬乗りになった。そして優しく彼女の旨や股間を撫でた。その刺激に、身動きが取れないまでも、苦悶の表情と喘ぎ声を上げながら、頬を赤らめるハマーンの姿があった。それを見て、ペニスが硬くなったジュードーは、左手でハマーンの右乳首を触りながら、右手は固くなったペニスをしごき始めた。刺激による快樂に、ジュードーの呼吸が荒くなった。ペニスを擦る右手が徐々に早くなり、ハマーンを見つめる目が快感でトロンとしていた。やがてハマーンがそつと囁くように言った。

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

「ジュドー…貴方のペニス…舐めさせて…」

「えっ？いいの？口でも？」

「私の穴という穴は全て使っても構わないって言ったでしょ？」

「じゃあ尿道とかでもいいの？」

「え……それは……まだ小指位までしか拡張してないから……」

「へえ……そんな事もやってるんだ。君って本当に快樂の為なら何でもするんだね」

そう答えるジュドーのペニスは更に硬くなった。それをハマーンの口元に持って行くと、彼女は拘束されて身動きが取れないながらも、舌を使って亀頭の周りを優しく舐め回し、やがて口の中へとペニスを含んだ。そして口の中でペニスを前後させると言うよりは、舌でジュドーの亀頭付近で一番感じる所を探り当てて、そこを重点的に舌で優しく、そして時には激しく擦った。やがて、ジュドーがたまらずにその動きに合わせてペニスをしごき始めた。

「あ……そこ……感じる……あ……あ……あ……出そう……出そう……出るよ……あ……あ……あ……」

そう言った直後、ハマーンの口の中へミルクを射精するジュドー。そして出し切った後、呼吸を整えてハマーンの口からペニスを抜いた。彼女は幸せそうな顔をしてジュドーを見つめると、口の中に溜まったミルクを見せた後、愛しそうに飲み込んだ。更に再び口を開けたので、ジュドーはペニスに残っているミルクを根元から絞り出し、それは糸を引いてハマーンの口へ垂れた。その後彼女はペニスの先端に残っていたミルクを舌で舐め取った。

「ふふっ……くすぐりたいよ……ハマーン」

「御免なさい……でも汚れたペニスを綺麗に掃除するのは……当然の様に教わったから……」

「そんな風に調教されてたんだ……本当に変態なんだね」

「……」

頬を赤らめて返答に困っているハマーンに、ジュードーは更にこう言った。

「何ならこの姿を撮影してばら蒔いてみようか？」

「それは……私にとつてご褒美にしかないかも……」

「えー！それは……」

その言葉に焦るジュードー。それを見ながら、顔を火照らせたハマーンがそつと囁いた。

「ふふっ……。戯れはこれ位にして……そろそろプレイを始めたいと思うけど……いいかしら？」

「うん。いいよ」

「じゃあこれから二時間以内に私が快楽に耐えきれなくて降参したり、貴方が五回……今の一回を差し引いてあと四回射精する事が出来たら貴方の勝ち。逆に出来なかつたら私の勝ち……よくて？」

「ああ……でも本当に大丈夫なの？」

「ジュードー……これは私と貴方の勝負なのよ。私を貴方のモノにしたいのだったら、覚悟を決める事ね」

「……判った……じゃあ……始めるね……」

そう言うと、ジュードーはクリトリス、前、そして後ろの穴に仕込まれたバイブのスイッチを入れた。

*

*

*

プレイ開始から十五分位経った。ハマーンは彼がスイッチを入れた直後から、敏感な部分への絶え間な

い刺激に声にならない喘ぎ声を叫び続け、刺激の度合いに呼応してほぼ三十秒間隔で絶頂を迎えていた。その都度、体に入り縄が容赦無く体を締め付けた。また、その際にお腹や股間、肛門部分が盛り上がった様になる事から、絶頂を迎える際はかなり力が入っている事が見て取れた。

ハマーンはそれらのバイブを抜きたくても手の自由が利かず、更に縛った縄で強引に固定されている為、絶頂を迎えては荒い息を上げ、そしてまた徐々に絶頂へ……という行為をずっと繰り返していた。

「あつ……ああつ……イクツッ！！ああああつ！！グギギッ！！ああつ……はあ……はあ……はあ……。あ……またイクツッ！！イチちやいそう……ああつ！！！」

余りの快感に、目、鼻、口から、そして股間からもオシッコと愛液、そして後ろの穴を塞いでいるバイブの間から、更に全身の毛穴から体液を垂れ流していた。

その状態に、ジュドーはハマーンの体にシャワーをかけて体液を流そうとしたのだが、使用した縄が一定の水分を含むと縮む性質の物であり、その為ハマーンの体を更にきつく締め上げた。

「ああ！縄が……締まる……ううっ！！！」

胸の部分が締め上げられて異様に強調された。それを見たジュドーはバイブのスイッチを止めて、ハマーンの上に覆い被さり、胸を揉みながら口に含んだ。

「あ……ジュドー……あんっ！」

快楽を受け続けた為、全身が性器と同じ様な状態になっているハマーンは、今までの機械的な刺激とはまた違った刺激にいやらしい声を上げて答えた。ジュドーが左右の胸を交互に舐め回しながら言った。

「ハマーン……俺……こんな君の姿見て興奮して……」

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

「見るのも嫌になる位軽蔑した？」

「ううん。逆に君の中へ入れたくて……そして激しく君を犯したいっていう衝動が……止まらないんだ！ ああっ！おかしくなっちゃったんかな俺……」

「ふふっ。性欲というものは極端な事を言えばそういう事よ。パートナーに欲情する、自分の子種をその中に出したい……もつとも快楽を優先しているのは人間だけだけど……。でも私はジュードーにそう言われて……とつても幸せよ。前でも後ろでも好きな穴を使って……。もしこのプレイで子供が出来たとしたら……私は後悔しないわ……」

「その時は俺も覚悟を決めるから……今は楽しむ事だけ考えるよ」

ジュードーはそう答えると、ハマーンの股間に食い込んでいる縄を左右に広げて、前の穴からバイブを抜くと、自らのペニスを一気に突き刺した。

「ひぎっ！」

その荒々しい行動に驚くハマーン。ジュードーは縄から手を外した。彼女の股間の縄がジュードーのペニスを圧迫し、更に手足を拘束している状態なので中々ベストな姿勢は取れないのだが、腰の下に物を置いて下半身を浮かす事でやっとな安定した状態を作り出す事が出来た。

「これで……何とか動けるかな……」

「繋がったままあれこれ試すなんて……抜けば良かったのに……」

「だって俺……君と繋がってたかったんだもん」

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

「ホント……物好きね……あんっ！」

「バイブみたいに振動しないし、サイズも小さいけど……我慢して…ね…」

「そんな事……ああっ！とつても……ああん……気持ちいいっ！」

ハマーンが全身を硬直させて感じているのが判る。そしてジュドーのペニスを股間の粘膜が優しく包み込み、数分間腰を動かしただけでジュドーは呆気なくミルクを放出してしまった。

「ああっ！くっ………」

ハマーンの股間にありつただけのミルクを絞り出そうとするジュドー。そしてペニスの痙攣が終わると、ハマーンの胸にドツと倒れ込んだ。

「はあはあはあ………」

余りの快樂と疲労に、言葉を発する事が出来ないジュドー。そんな彼にハマーンは少し疲労した声で言った。

「さあ……私をモノにするにはあと一時間半の間に三回出さなきゃならないのよ。ゆっくり休憩してる暇は無くつてよ」

そう言ってジュドーに前の穴へ先程よりも太いバイブを入れる様に促した。また左右の乳首に乳首用のバイブレーターを装着するようにも言った。それをジュドーは言われるままに行動したのだが、射精した後という事もあつてか、その行為に少し罪悪感が芽生えていた。それを敏感に察するハマーン。

「どうしたの？」

「いや……何というか……そりゃ君のこんな姿をみる事が出来て嬉しいんだけど……結局は俺が二時間

で五回ミルクを出せるかどうかだけで良かったんじゃ……君までこんな苦しい事しなくても……ってね」
「心配してくれてるの？」

「まあ……」

「ふふっ……優しいのね……。でもジュードーがペニスを勃起させてミルクを出すのが辛い様に、私もそれ
相応の辛さを味わってないと不公平かなって……」

「そんな事……」

ジュードーがそう言った時、ハマーンはそれを遮ってこう答えた。

「ゴメン。私……今嘘付いちやった。本当はこういう事が好きな変態女なの……。最初は人が死ぬ苦しみを
感じる事から逃れたくてこういう事始めたんだけど……。毎回『もうこんな事やめたい』って思っても、し
ばらくするとまた体が疼いて同じ事やってしまう……。しかも少しずつエスカレートしていつてここま
でハードなプレイになってしまった……。でも全く後悔はしてないから……。さっ、話はこれ位にして……
今、私達がやらなければならない事を……。やりましょ。ね？ジュードー？」

その後、ハマーンはバスルームとは言えオシッコを漏らさずにプレイ出来る様に（とは言ったが、実は
ハマーンの好きなプレイである）バルーンストッパー付きのカテーテルを彼女の指示で尿道に入れる様
に頼んだ。ジュードーは最初その行為を怖がっていたが、カテーテルにゼリーを塗り、尿道へ挿入するとや
がて先から彼女のオシッコが出てきた。彼は咄嗟にその先端をハマーンに啞えさせた上で、カテーテルの
バルーンを膨らませて膀胱から飛び出さない様にした。一通りの行為を終えてハマーンの口からカテー
テルの先端を受け取り、二つに曲げてクリップで留めた。これでオシッコが絶頂を迎えた時に漏れる事は

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

無くなった。

「さっ。君の言う通りにしたけど……作業の間も結構管の中をオシッコが流れてたね。……それ……飲んだのかい？」

ジュドーの言葉に、恥ずかしそうな表情で首を縦に振るハマーン。

「へえ……飲んだんだ。自分のオシッコを……本当に君って変態のMなんだね。で、自分のオシッコはどんな味だった？」

「はい。塩辛くて……説明出来ない味がしましたが……Mの私には勿体ない飲み物でした」

「ふくん。そうなんだ。じゃあ、俺のも飲んでみるかい？」

「えっ？」

ハマーンが驚いていると、ジュドーは彼女の腰辺りにまたがって立ち、男子トイレでオシッコをする様な感じでハマーンに出そうとした。だが、そんな経験が無いジュドーは羞恥心や躊躇いがあったか中々オシッコが出なかったのだが、やがてチヨロチヨロと先端から出す事が出来た。そしてオシッコをハマーンの胸や体に向け、目をつむって口を開いている中にも注ぎ込んだ。それを溢れさせながらも必死に飲み込むハマーン。その行為に興奮したジュドーは、彼女の体にかけてオシッコを手で塗り広げて、最期に指を彼女の舌で綺麗に掃除させた。その一連の行為に自己陶醉して感じているハマーン。

そして再び各バイブのスイッチが入れた。その瞬間ハマーンの体が一瞬跳ねて絶頂を迎えた為大きな麻痺を起こしたのだが、このプレイに感覚が麻痺したジュドーは、その姿を見て再び心の中に淫乱な心が沸き上がるのを感じていた。

その後、ジュドーはしばらくその光景を楽しむと、彼女をうつぶせにして後ろの穴に挿入されているバイブを抜き取ると、事前に説明されていた浣腸液を百CC程注射器を使って注入した。そして一回り大きいバイブに交換して充分なワセリンを塗った後、ゆっくりと彼女の後ろの穴に差し込んでいった。その行為に思わず声を上げるハマーン。

「あ……おおっ……うっ……おおっ……！」

挿入し終えたジュドーは、左右に開いていた股縄を挿入したバイブの上に戻した。これで腸圧によってバイブが排泄物と共に吹き出す事は無くなった。だが、それはハマーンにとっては更なる地獄の苦しみに繋がった。やがて浣腸液の効果が出てきた彼女は、快楽とは別に苦痛を感じる様になった。だが快楽も苦痛も今の彼女にとっては『体を刺激するモノ』でしかなかった。

「ぐっ……あああっ……出る！出ちゃう……！がああ……！」

口を半開きにし、そこからは常に唾液が顔を伝って垂れた。また、彼女は意識していないだろうが、鼻水と涙、そして体中から脂汗が常時溢れ床に落ちて水溜まりを形成していった。苦痛と快楽が入り交じった中、彼女は何度も絶頂を迎え、そして失神してはまた快楽と苦痛に目覚めて悶えるという行為を繰り返した。この状態から抜け出そうにも、全身を縄掛けして身動きが取れない様にして、彼女が絶頂を迎えて全身を強張らせる度に、手首、胸、太もも、そして体中に縄の跡が赤く、はつきりと跡を刻み込んでいった。

その後ジュドーは自分のオシッコを洗面器に出して注射器でカテーテルを通してハマーンの中に入れ

*

*

*

てそれを彼女に飲ませたり、空気を膀胱の中へ吹き込んで、その圧迫感に苦しむ姿を鑑賞した。そしてハマーンが浣腸の苦しみに耐えられなくなり、意識が遠のいて来たのを察すると、お尻でバイブを押さえていた股縄を手で左右に開いた。すると彼女の肛門からバイブが勢いよく飛び出し、その後に茶色く濁った液体を噴射したかと思うと、苦しそうに呻きながら排泄物をバスルームの床にぶちまけた。

「ああっ！ぐううううう！！出るっ！！！」

涙で顔をグチャグチャにしながら、苦しい表情で何度も肛門に力を入れて排泄物を出すハマーン。そして出し終わっては腸が収縮する反動で苦しみながらも絶頂を迎え、そしてまた排泄して……という行為を何度も繰り返した。バスルームにはハマーンが出した排泄物の匂いが充満し、肛門からその先の方は飛び散った排泄物で壮絶な光景となっていた。更に二人から発する淫乱な匂いで頭が麻痺していた二人は、そのまま体を重ね、濃厚なキスをした。ジュードーは飛び散ったハマーンの排泄物が体のあちこちに付着していたが、不快感を覚えるどころかその事自体に興奮を覚えて逆に股間を固くするのだった。やがてハマーンがジュードーの耳元でこう囁いた。

「貴方の手を……私の後ろの穴に入れて……中から……かき回して下さい」

その言葉に驚くジュードー。

「えっ！俺の手……入れちゃうの？というかこの手……入るの！？」

「多分……肛門の拡張に関しても義姉に徹底的に仕込まれてるから……。拡張プレイで私は七センチ位までなら問題無く入るけど……八センチも丁寧に解せば入るし、何回かは九センチのアナルストッパーも入った事があるから……ジュードーの手も多分入ると思うわ。だから……お願いします……」

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

「二人で一体何をしてるんだよ……」

ジュードーは呆れた顔でそう答えると、右手にローションを塗って、ハマーンの肛門に指を一本、また一本と挿入していった。そして五本の指が入ると、ゆっくりと左右に回転させながら手を押し込んでいった。

「がつ！おとおお！ぐう！あつつつ！ああつ！……うううつ！」

その最中、ハマーンは声にならない声を上げていたが、ジュードーの手の一番太い部分が肛門を抜けて中へ吸い込まれる様に入っていくと、その異物感と刺激と達成感が合わさり、深い絶頂を迎えた。

「ああつ！この満たされる感触……好きつ！……あんつ！……」

「本当に入ったね。ハマーン。それにしてもペニスだと良く判らなかつたけど……直腸って生暖かくて柔らかくて……いかに『内臓』って感じなんだね。いや、いつも使ってる穴と同じ『性器』って感じの方がぴったりくるかも……ね。でもお尻に手が入ってるって……冷静に見ると凄い光景だよね」

ジュードーはバスルームにある鏡の方を見る様に促した。そこにはハマーンの肛門にジュードーの右手首までがしっかりと収まっている光景が映っていた。思わず顔を真っ赤にするハマーン。

「ああ……ジュードーの手が私のお尻の中に入ってる……。とっても恥ずかしくて胸がドキドキしてる。でも、そんな事がとっても気持ち良いって思ってる自分がいるの……。淫乱で……変態で……最低な雌犬なの……私！」

その言葉に、優しい声で答えるジュードー。

「いいんじゃない？俺も似た様なもんだから。それに興奮めどころか益々興奮してきたんだけど」

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

そう言い放つジュードーのペニスは、ギンギンに太く、反り返っていた。その後ジュードーはハマーンの肛門の中で中をこねくり回したり、中で手を開いたりピストン運動をしたりして、彼女を何度も快樂と絶頂に導いた。時折彼の手に彼女の腸の奥の方から排泄物が降りて来るのだが、彼はそれを中で握るとそのまま手を肛門から抜き、彼女が軽く絶頂を迎えている体に塗り付けたり、口の中へ入れたりして彼女に軽蔑の言葉を浴びせた。すると、ハマーンはその言葉に悶え、恍惚の表情を浮かべて何度も軽い絶頂を迎えた。そしてジュードーはまた手を肛門の中へ入れて……というプレイをしばらくの間続けた。

やがてジュードーはシャワーでハマーンの体を洗い流し、直腸内にある排泄物もなんどもお湯を注入しては排出させて綺麗にしてから、相変わらず身動きが取れない彼女の肛門にペニスを挿入して獣の様に激しくピストン運動を行い、中にミルクを大量に発射した。さすがに三回目の射精……それ以前から数えると二桁に近い射精を終えると、さすがのジュードーも肩で息をする位疲労していた。だがハマーンの肛門に再びバイブ……それも今までよりも更に一回り大きなバイブを差し込んでその光景を彼女の下半身の方から眺めてペニスをしごき、苦しみながらも何とか四回目の射精感覚を迎え、水に近い様なミルクをハマーンの体に向かって放出した。その時全身を小刻みに震わせて絶頂を迎えると、そのままゆっくりと彼女の上に倒れた。

「はあ……はあ……はあ……！！！」

しばらくして何とか起き上がったジュードーだったが、もうハマーンの姿を見ても、股間を手で擦っても、シャワーや様々な刺激を加えても、全くと言って良い程彼のペニスは弱々しく下を向いたままピクリとも反応しなかった。

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

「くそっ！あと一回ミルクを出すだけで良いのに……」

「まだ三十分位……ああっ！グッ！あああっ……。はあ……。はあ……。時間があるわよ」

「そうだけど……。もうペニスに全く力が入らないんだ」

「二ユータイプ……。相乗感応効果で勃起させる？」

「それはフェアじゃない。自分の力で立たせて射精してこそ……。堂々と君を俺のモノにする事が出来るんだけど……」

そう言いつつ、ジュードーは今までハマーンや自分に対して行つた言葉責めを含む様々なプレイを再現し、何とかペニスを勃起させようとした。だがその努力の甲斐も空しく制限時間を迎えた。彼は半失神状態にいるハマーンのバイブのスイッチを切ると、悔し涙を浮かべながらこう言い放つた。

「……この勝負……。俺の負けだ……。ちくしょう……」

「……」

ハマーンはその言葉に何も答えられなかった。やがてジュードーはハマーンを縛っている縄をハサミで切り、自由になったのを確認すると彼女に覆い被さる様にゆっくりと倒れた。そんな彼を優しく抱き締めるハマーン。

「お疲れ様……。ジュードー」

「あと一回、あと一回出すだけで……。君を俺のモノに出来たのに……。ちくしょう……。悔しいよ」

「ふふっ。これが私とジュードー……。二人の距離という事よ。私とシヤアとの距離もそうだったし、こればかりは仕方が無い事……。でも、私と一緒ににはなれなくても……。私の体が欲しい時は、今まで通り会いに

来て私の体を徹底的に弄んでも構わないのよ。それだけは……約束する」

「割り切ったセックスフレンドの関係として？」

「そういう事に……なるわね」

「俺としてはそれ以上の関係になりたかったんだけどな」

真剣な目で見つめるジュードーに、ハマーンは何とも言えない幸せな気持ちになった。

「本当に……ありがとう……ジュードー。その……プレイしてる間だけは、今まで以上に貴方の事を愛するって誓うから……それで……」

その言葉にジュードーは複雑な表情で答えた。

「そう……だね。それが一番良い付き合い方ってやつなのかもね……。俺も『ずるい大人』になっちゃったな……」

「そんな事無いわよ。ジュードー。貴方は今でも真っ直ぐで優しい男よ。ただ、私とは縁が無かったただだから……。本当に……御免なさい……ジュードー……」

「……………」

その言葉にジュードーは何も応えられなかった。やがて二人はどちらからともなく深い眠りに落ちた。

*

*

*

どの位経っただろうか、ジュードーが目を覚ますとハマーンが彼のペニスを嬉しそうに指で触ったり擦ったり、舐めたりしていた。ジュードーが起きた事に気が付くとハマーンは声をかけた。

「あ、また起こしてしまったわね。ゴメンなさいね」

「何かペニスがかくすぐったいなと思って……でも何してたの？」

「ふふっ。私との約束は時間内に五回ミルクを出す事だったでしょ？だから……勝負には関係無いけどもう一回出せないかなって……」

「……その感覚がもう自分のモノじゃない感じなんだ。もう少し時間を置かないと……」

「うん……そうみたいね」

ハマーンはジュドーのペニスを触りつつ、その反応を確かめながら言った。

「ハマーンは体……大丈夫なの」

「ふふっ、大丈夫だと思う？」

「見た感じ……元気そうだけど……実際はかなり疲れてるんでしょ？」

「そうね。二時間の間に……一分間に二回位イッたとして……貴方とお話した時間とかもあるからざっとだけど二百回以上はイッたと思うわ……。途中からは気持ち良いのを通り越して苦しくてたまらなかつたけど。で、その結果がこれよ……」

ハマーンはクリトリスとヴァギナの辺りを指で軽くさすった。するとそれに股間が反応して大きく盛り上がり、中身が出てきそうな感じになった。

「もう感じ過ぎちゃっておかしくなってるのよね。だから少しの刺激でも子宮が落ちてくる感じになって……。後ろの穴の方も同じ……見て」

クリトリスを触っていた手を肛門に当て、数本の指を中に入れて優しくこねくり回した。するとやはり肛門が大きく盛り上がり、パツクリと開いた肛門から綺麗な色をした直腸が今にも飛びださんかという

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

感じでグロテスクな模様を醸し出していた。そしてそれを触っていたハマーンの手動きが激しくなり、軽く絶頂した。

「ああっ……………あああっつっ!!」

その直後、肩で大きく息をするハマーン。

「はぁ……………はぁ。はぁ……………」

そして息が正常に戻ると再び肛門を刺激し、同じ様に何度も絶頂を繰り返した。どの位の時間が経っただろうか。体の限界を迎えたのか、ハマーンは肛門での自慰を止めてジュドーに告げた。

「どうだった？ジュドー」

「どうだったって……………イク瞬間に肛門がこれでもかかって盛り上がって開いて……………中から直腸が今にも飛び出しそうになって……………イッてもイッてもすぐに指で触りまくって……………。クチャクチャとイヤらしい音は鳴ってるし……………中から腸液は垂れてくるし凄いとしか言い様が無いんだけど。でもその肛門が開いてるのって脱腸してるって事なの？」

「極めてる人から言わせればこの位じゃまだまだみたい……………。でも義姉にこのままハードなプレイを命令されてたら時間の問題かも……………ね」

「俺としてはそこまでするって欲しくはないんだけど……………セックスフレンドとしては……………だけど」

「ありがと。ジュドーが嫌ならこれ以上の拡張はやらないわね」

「さっきのが『アナルローズ』ってヤツなの？」

「まあ……………一応そう……………かな？ただ私の場合はそんなに肛門の外へ出てないから……………余り綺麗に咲いて

ないけどね」

「もう一回咲かせる事って出来る？」

「えっ？アナルローズの事？」

「そう。だって『ハマーン様は薔薇がお好きだ』って、その昔聞いた事があるしね」

「懐かしいわね……あれはドズル様から頂いた花が薔薇だった……そういう理由なんだけどね」

そう言うハマーンは一息付いて声をMの時に話す口調に変えてこう言った。

「ではジュドー様。今から私……ハマーンのアナルローズを咲かせますので、じっくりと鑑賞して下さいませ……」

彼女はそう言う足を開き気味にして肛門をいじり、少し力を入れてアナルローズを咲かせた。すると、ジュドーは彼女の腰を自分の膝の上に載せて肛門を上にする（まんぐり返し状態）、口と舌を使ってアナルローズを舐め始めた。その行為に、思わず声を上げるハマーン。

「ああっ！ジュドー……そんな事すると……ああっ！！」

肛門に力が入り、再び綺麗な『花』を咲かせた。ジュドーはそれを舐め続け、彼女を何度も絶頂の中へ堕とした。やがて刺激により肛門からやや茶色気味でネットリとした腸液が出てきたのだが、興奮しているジュドーはそれを舐め、愛しそうに口に含み、飲み込んだ。それを見てハマーンはこう言った。

「あっ！ジュドー……汚いわよ……」

「いつもは嫌がっても無理矢理命令するくせに何言ってるんだよ。そりゃ最初ここを舐めろて綺麗にしろって言われた時はずっと嫌だったし、吐き気はしたし泣いても決して許してくれなかった癖にさ……。で

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

も人間って本当に好きになる……いや愛し合うと、匂いや味とか以前にその人の全てのモノがとっても愛しくなるんだね」

「えっ……はぁ……はぁ……どういう事？」

「君の体から生み出される汗、涙、唾液、オシッコ、そして排泄物……全てが愛しく思えてくるって事さ。だから今俺がしてる事って君から頂ける『ご褒美』なんだよね」

「私と再会しなければ、こんなプレイをする事も無かったのに……ね。あっ！ああっ……」

「俺って好奇心旺盛だから、君と再会出来てこんな色々なプレイが出来て良かったと思ってる。少なくとも戦争するよりはよっぽど良いって。誰に迷惑を掛けてる訳でも無いし……」

「そうね。ああっ！イクッ！！！」

肛門が盛り上がり、何度目かの絶頂を迎えるハマーン。ジュドーはその一部始終を愛しそうに見ていたが、絶頂が収まると再び肛門に下を潜り込ませた。すると排便反射が起きている為か、あっという間に肛門が開き、直腸が外へ飛びださんばかりに露わになった。彼は再びそれを愛しそうに舐め始めながら、ふと思い立った様に言った。

「ハマーン。その……何か興奮する話って無いかな？」

「こ……興奮する話って……私の事？」

「勿論だよ。俺としての事以外にも色々変態な事してるんでしょ？まだ話してない事もあるんじゃないかな？教えて欲しいんだ。君自身の言葉で……ね」

その言葉に、快樂の中で少し困惑した表情を浮かべたハマーンだったが、やがて顔を赤らめながら言っ

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

た。

「ジュードーって……私が外でプレイするのが好きなのは……知ってるわよね」

「ああ、君と何度かプレイもしたし、君がそういう調教を徹底的に受けたから、時々思い出すと体が疼いてたまらないってのも聞いた様な気がする」

「ええ、そう……。ただこのコロニーで生きる様になってからは、もうストレスとも縁が無かったし室内での軽いプレイ位で満足してた筈だったの……。でもね……」

「……？」

「いつ頃だったか忘れたけど……セイラ義姉さんが訪ねて来て……。成り行きで体を重ねた時にシヤアとハードなプレイをしていた頃の快楽を体が思い出して……。義姉さんも幼少期にシヤアから調教を受けて人生変わったって言ってたから、波長が合っちゃったのよね。それからは薬以外で快楽の為だったら何でもプレイする様になって……。で、そんな時にジュードーと再会したという訳なのよ」

「成る程ね。じゃあセイラさんと出会わなかったら俺ともこんな関係に……。いや、再開すら無かったかも知れないね」

「……かもね。でも、私は人の縁を信じるタイプなので、セイラ義姉さんと会ったのも、ジュードーと再会したのも運命だと思ってるわ」

「俺とこんな関係になったのも？」

「ええ。少し遅かったけど……『解り合えた』訳でしょ？ 私達……」

その言葉に、ジュードーは一瞬照れくさそうな表情を浮かべた後、再びハマーンの肛門に舌を這わせた。

彼女の喘ぎ声が再びバスルームに響き渡った。

「あああつ！……で……ね。ジュドー。こういう……プレイをしてる時はまだ……いいんだけど……ああつ！。お散歩とか買物とかしてる時……ふと体が疼いてたまらなくなる時があるのよね。『こんな人がいる中でオナニーしたら気持ち良いかしら……』とかつい考えてしまつたらもう大変……。股間は疼きまくって……ラブジュースは出てくるし……体は火照ってどうしようも無くなるし……」

「で、そういう時はどうするの？君の事だから家に戻って……って事は無いよね」

彼女の告白に興味が湧いたのか、ジュドーは肛門を舐めるのを止めて床に仰向けに寝そべっている彼女の上に覆い被さる様になり、しっかりと彼女の目を見ながら言い放った。するとハマーンが恥ずかしそうに視線を逸らせようとしたが、ジュドーは右手でハマーンのおでこに手を当てて、顔をギリギリまで近づけながら言った。

「目を逸らしちゃだめだよ……。さあ、俺にどんな事をしたのか告白して貰おうかな……」

彼の言葉に、ハマーンは視線を合わせると顔を真っ赤にしながら告白しだした。

「はい。告白します。……そんな気分になった時……まずは公園のベンチやイスにがある所を探して、他の人に気付かれない様にクリトリスを擦って軽くオナニーをします。大抵はそれで二、三回絶頂を迎えれば収まるのでいいのですが……それでも疼きが収まらなかつた場合は……」

「どうするの？物陰に隠れて全裸オナニーでもするのかい？それとも浣腸プレイかな？」

ジュドーがニヤニヤしながら言い放った。

「あ……確かにそのプレイは魅力的ですし、深い快樂を得られるとも思うのですが……このコロニーでは

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

昼にそういう行為を公で行う事は犯罪ですから……夜ならばまだ情状酌量の余地もあるので数回プレイした音は……あります」

「えっ！やった事あるんだ！本当に君って淫乱の変態なんだね。見付かって犯されでもしたらどうするんだい？」

「それは……細心の注意を払いますし……人の気配はニュータイプの能力である程度は判りますから」

「ニュータイプの能力をオナニーの為に使うなんて……それも元ネオ・ジオンの指導者がねえ……。俺が当時の部下だったとしたら、そんな人の下で命を賭けていたのかって気分になっちゃうかもね。そんな勢いで犯しちゃうかも……」

その言葉に、ハマーンは真面目な顔で応えた。

「その時は……上に立っていた者として責任は負う覚悟でいるわ……。それに殺されても文句は言えない立場だし……」

「俺とのセックスやハードなプレイもその延長みたいなものかな？自分が人生を狂わせた者への義務みたいな……」

「それは違うわ。私がジュードーとこんな関係でいるのは、私がジュードーを気に入ったからなのよ。疑うのなら……私の頭の中を覗いても良いけど……」

ハマーンの言葉にジュードーは即答でこう答えた。

「いや、それはやめとくよ」

「どうして？」

「何というか……君とシャアやアムロさんとの行為をあれこれ想像……いや妄想したり、君の口から告白させるといふのなら……まあ興奮するんだけど、その時の行為や君の感情とかが俺の頭の中に入ってくるっていののは……さつきも言ったけどダメなんだ……嫉妬しちゃうから……」

その言葉に、ハマーンは嬉しそうな表情で言った。

「じゃ、ジュードーが興奮してくれるのを願ってさつきの話の続きを話す……いえ告白するわね。で、軽いオナニーで満足出来ない時は、洋服店の試着室とかも使うけど、多いのは人が少ない公園のトイレ……それも多目的の場所じゃなくて左右に個室が並んでいる普通の女子トイレに入って……火照った体をこれでもかかって位静めるの……」

「ふん」

個室ならそんなに危なくないな……と思っていたジュードーだったが、ハマーンは彼の予想を上回る告白をした。

「今、個室でオナニーするだけなら大した事無いと思ったでしょ？ 実際最初の頃はそんな感じだったけど、段々エスカレートして、全裸になって最低二十回はイカないと終われないというルールを作ったの。それに人が来た場合はその場で用を足している間に最低一回はイク事、人が来ない様だったら手洗い場の鏡の前で一回イク事という決まり事を作ったし……最近はそれでも満足出来なくなってきたから薬局で浣腸を買ってきて、イキながら排泄する事もしてるかな……。この前なんか浣腸して洗面台の鏡の前でオナニーしたんだけどイッて個室へ戻る前に少し漏らしちゃって……後始末が大変だったわ……。でも火照りが収まってみると……私……またこんな所で変態行為をしちゃったんだって自己嫌悪になるんだ

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

けど……家に戻ってそれを思い返すと……また股間が疼いちやうのでベッドの上で前と後ろの穴にディルドを突っ込んで何度も何度もオナニーして……」

そこまで言った時、ハマーンはジュドーの股間を見た。そしてこう言うのだった。

「もう……大丈夫みたいね……」

「え？何が？」

「それ……立ってるわよ」

ジュドーのペニスをそつと握るハマーン。完全回復まではいかないまでも、今の話を聞いてかなり固くなっていった。その状態に、一番驚いたのはジュドーだった。

「あれ？いつの間に固くしてたんだ？話に夢中だったから全く気付かなかったよ」

「ふふっ。私の話に興奮してくれたのね」

「そりゃ、あんな事をしてるつてのを聞いたら……ね」

「今度ジュドーも一緒にやってみる？脳が痺れる位気持ち良いわよ」

その言葉にジュドーはこう応えた。

「うーん。君がそういうって事はその内命令されるって事なんだろうけど……。俺、トイレでやるとしたら……君とのセックスの方がいいかな。個室でお互い裸になってトイレ独特の匂いを嗅ぎながら声を押し殺して絶頂を迎える……考えただけで興奮してきちゃうよ」

「なら、今度会う時は……私とトイレでじっくりとお相手してくれるのかしら？」

「えっ？そ……そうだね。バレない場所があるんだったら……」

～ ハマーンとジュードー 愛の営み ～

「そんな所でやってもスリル無いでしょ？貴方も女装して女子トイレに入って、人がいなくなった隙に一緒に個室に入ってプレイするのが面白いのよ？判る？」

「それはそうかも知れないけど……見付かったら俺、捕まっちゃうよ」

「それ位のリスクを覚悟しなきゃ、私のセックスフレンドなんて務まらないわよ？ジュードー？私とプレイしている時は、貴方のミルク一滴まで私のモノなんだから……」

「ははっ……まあ……君の事だからそれでもギリギリの一线は把握してるだろうから……その時は精一杯プレイを楽しむ事にするよ」

「ありがとう。ジュードー。じゃ、そのペニスが小さくならない内に……私の中に……来て……もう一回出す約束でしょ？」

ハマーンはそう言いながら足を広げ、股間では無く肛門の方に手を当て、穴を広げて催促した。それを見てジュードーは一瞬躊躇したが、唾を飲み込むと覚悟を決めてペニスを広げた肛門に当て、ゆっくりと挿入していった。その時、彼は直腸の中が先程プレイした時よりも必要以上にペニスを圧迫……というよりは外へ押し出そうとしている様に感じた。その感触に、思わず声が出るジュードー。

「あれ……さっきはもつと緩かったような気がするんだけど……」

そう言いながらも、ゆっくりとピストン運動をしながらアナルセックスを楽しむジュードー。それにハマーンは苦痛と快楽に襲われながらも答えた。

「あっ……それは……ああっ……！よくアナルセックスって……い……入り口だけキツくて……あんっ！な……中はそれ程でも……無いって言うでしょ？」

「ああ、そう聞いたし、実際君以外の人とプレイした時も、そんなに気持ちいいモノじゃ無かったんだけど」

「それは……中を……開発してないから……よ。私の様に後ろの穴で快感を……はぁ……得られる様になると……長時間の刺激で肛門や腸がが緩んでたり、浣腸で腸が敏感になると……あぁっ！イクっ！……排便反射で異物を外へ出そうとするの……」

「けっ結構……凄い力でペニスが圧迫されるんだけど……」

「腸圧はかなり強いから……でも、苦しいって力むと……体の中から一気に……快感が……込み上げてきて……何度も何度もイカされちゃうの……。だから……なるべく力まない様にするんだけど……」

そうハマーンが言った時、ジュドーが更に激しくペニスを突いた為、彼女はこれまで聞いた事が無いような声を上げて絶頂を迎えた。それまでの疲労の蓄積もあり、かなり激しく肩で息をするハマーン。

「大丈夫かい？」

そう言いつつ、ピストン運動をゆっくりと優しく行うジュドー。

「だ……大丈夫……。確かにもうイクのは苦しいし……もうイキたくないって思ったりもするけど……その後、体が弛緩する時……何とも言えない気持ち良さになるので……もう一回……もう一回だけ昇天したいって思ってしまうの……。そしてイクとまたもう一回って……これが永遠に続けば……ってイヤらしい事を考えたり……」

「それが君が言ってる『果ての先』なのかい？」

「わ……判らないけど……苦しみと快樂の終わりは……死の様な気もする……。でもそうなったとしても、

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

私は後悔しないと思う……」

「そんなにまでして快樂を追求しなくてもいいんじゃないか？何事も程々が良いと思うけど……」

「普通の人生を歩んでいたとしたら……そうするわ。でももう私の体は……いえ精神はもうまともには生きられそうもないから……。でも信頼する人のカウンセリングも受けてはいるのよ。こういう事は少しずつ終わりにしようって……。それに。ダブリンにコロニーを落とした時の……人々の苦しみの念が頭の中に入ってきた時に比べたら……愛している人から受ける苦しみ……そしてその先に快樂が待っている行為なのだから……耐えられるの……」

その言葉にジュドーは少し考えた後答えた。

「ハマーン……。君が……君自身を判っていて……納得してやるのなら……俺は何も言えないや。でもね。昔は君一人だったかも知れないけど……今は俺が側にいる……。苦しみを紛らわせる行為じゃ無くて、幸せを楽しむ為の行為に……少しずつで良いから変えて欲しい……俺の為に……頼む」

「……うん……こんな私を心配してくれて……ありがとう……ジュドー……嬉しい」

何度も絶頂を迎えた為、目、鼻、口から体液を流してグチャグチャになってるハマーンだったが、ジュドーを抱き締めると、濃厚なディープキスをした。そしてそれを終えた後、彼女はこう言った。

「涙や鼻水や……ヨダレまで垂れ流して……イキまくって……私の顔……変でしょ？ジュドー……こんな私が……ネオ・ジオンの指導者だったのよ……ははっ……最低よね……」

ボロボロと涙を流しながら話すハマーンに、ゆっくりとはいえピストン運動をしながらジュドーはこう答えた。

「そんな事無いって……。指導者の仮面を被った君も素敵だけ……全てを捨て切った君も……それ以上に素敵なんだって……。人生のパートナーになれなくて残念だけど……」

「ご……本当に御免なさい……ジュドー……」

「ああ……本当に『御免なさい』だ。だから今からそれを償って貰うよ」

そう答えるとジュドーは再び激しく腰を動かした。そしてどの位時間が経っただろうか……ハマーンがイキ過ぎて半分意識がトンだ状態になった頃、やっとジュドーは水のようなミルクを彼女の肛門の中に射精した。そして、ペイスを肛門から抜いたジュドーは、やはり激しく肩で息をしながら、ハマーンの横に同じ様に寝そべり、半失神状態の彼女を抱き締めながらしばらく時を過ごすのだった。

*

*

*

その後、かなり時間が立つてから二人は汚れた体を綺麗にし、簡単な食事と抗生物質を摂取した後、ベッドで二人がどちらからとも無く抱き付く様な感じで裸のまま眠りに着いた。そして目覚めては抱き合っている、キスをしてまた眠りに着くという事を丸一日行っていた。

どの位経った頃だろうか。ジュドーがやっとの思いでベッドから起き上がり、シャワーを浴びた後、冷蔵庫からコーラを取り出してグラスに注いでゆっくりと飲んだ。そして大きいため息を付いた後、ハマーンの方を見ると、彼女はまだ深い眠りに着いている様だった。

彼はその表情をしばらく見ていたが、やがて服を身につけて、静かに部屋を出ようとした。その時、ベッドからハマーンが言った。

「もう……帰るのね……」

「自営業って言っても、そんなに休んでばかりはいられないからね。エルやイーノ、リイナだって心配してるだろうからさ」

「……私の我が儘に付き合ってくれて……感謝するわ……」

「そんな事無いって。俺だって充分過ぎる位楽しんだし……お互い様だよ」

「ふふっ……そう言ってくれると……私も気が楽になるわね……。また……気が向いたら……貴方が結婚するまでの間は……来てくれると……嬉しい……」

その言葉を聞くと、ジュードーは彼女の元へ歩み寄り、こう言った。

「俺達はもう敵同士じゃ無い……。深い所までお互いをさらけ出した仲だぜ。君が来て欲しいと言った時は余程の時なんだろうから、何とか都合を付けてでも来る様にするよ」

「でも私達は……」

「今の世の中ってさ、結婚の相手と快樂の為の性交渉の相手が別ってのは特に珍しい事でも無いからね。人口が減り過ぎてるのが根本的な原因みたいだけど……。愛し合う相手が連邦だジオンだなんてのは関係無いって。そうだろう？」

そう言って軽くハマーンにキスをするジュードー。

「そうね。でも増え過ぎるとまた戦争が起こるかもよ」

「その時は……人は今よりも少し賢くなってると思いたいね」

「でも……貴方の恋人の方は……私とこんな関係になってるのを嫌がるんじゃないかしら？」

「そうだなあ……彼女もニュータイプだからいざれバレルだろうし……」

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

そう答えた後、しばらく考えてからジュドーはこう言った。

「よしっ！帰ったら君との関係を話してみるよ」

「それは……段階を踏んで説明した方が……」

「説明って言ってもこんな『ハード過ぎる』関係をどう説明すればいいんだい？ましてや敵だった相手との変態行為を……。確かに俺は君と同じ位エルの事が好き……。いや愛してる。でも君との関係も……。後の事は判らないけど壊したくないんだ。今ならエルも俺以外の男と付き合う事だって出来るし、元々責任は俺の方にあるから振られたとしても仕方が無いって……。諦めるさ」

「……私の身勝手さが招いた事なのに……。御免なさい……。本当に……」

「何言ってるんだよ。苦しんでる人を助けるのは俺としちゃ当然の事だし、君に惹かれたから肉体関係を持った訳だし、大体こういう事は、君に誘われたとしてたって俺がペニスを勃起させて突っ込まなければ始まらない事なんだから……そういう事」

「……………」

どちらからともなく濃厚なキスをする二人。唇を話すと、唾液が糸の様に二人を繋いでいた。

「そう言えば貴方に渡すモノがあったんだわ」

そう言うハマーンはベッドの脇から袋を取り出した。

「何なの？これ？」

「私がよく買ってるメーカーのショーツよ。同じ柄だけど三枚あるわ」

「え？女物？どうするの？これ？」

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

「どうするのって……それ使ってオナニーしてもいいし、下半身の毛を剃ってる訳だから身に付けるのもいいかも」

「身に付けるって……君のサイズのショーツを俺が？無理じゃ無い？」

「サイドの部分がゴム製で長さも調整出来る様になってるし、少し大きめのを買ってるから……。ただあくまでも女性用なので布が二重になってるのはクロッチの部分だけなの」

「白か……俺はこういうシンプルな下着の方が欲情しちゃうんだよね……」

「花柄とかが好きって人もいるけど」

「あとは黒とかラメが入ってるのとか……人の数だけ好みはあるからね。でもこれ、こんな小さな布の中にペニスや袋が収まるかな？」

「結構伸びる生地だから大丈夫だと思っけど……それでも横からはみ出る様ならハーフバックの部分をIバックの様にして布地を全体的に前にずらすといいわ」

「へえよく知ってるね」

「お店に来るお客様でそういうプレイをする人も多いの……だから自然と……ね」

「で、俺にも履いて欲しい訳？」

「強制はしないけど……お願いはしようかな……ふふっ！」

その言葉にジュドーは呆れながら言った。

「じゃ、エルに気付かれない様に時々……って事で……。まあ無理だろうなあ……見付かったら俺の趣味って事で言い訳しようっ」と

に入ると持ってきたバッグに仕舞い込み、部屋に忘れ物が無いのを確認してからこう告げた。

「じゃ、そろそろ帰るけど……またここへ来たくなかった時は連絡するね。で……その時はセイラさんも呼んでって……体が持つかなあ……」

「……本当にかなりハードな責め方するから覚悟してね……。たぶん私もジュドーと同じ様に雌犬として……あつ！」

ハマーンはそういうとシーツをまくり上げた。すると、少し興奮して腹部に力が入ったからか、尿と排泄物を若干漏らしていた。仕方が無いという表情を浮かべながら話すハマーン。

「ああ……やっぱり……」

「どうしたの？」

「限界超えて何度もイッたから……少しでも気を許すと前からも後ろからも漏れちゃうのよね……。少しすれば戻るけど……しばらくの間はオムツ履いて生活しなきゃダメみたい……」

「ダメみたいって……本当に大丈夫なの？」

「今の所はね……。まあやり過ぎると元に戻らなくなるけど……でも戦争で負傷した人が多いから医療技術がもの凄く進歩して……お金さえあれば自分の細胞で作れちゃう様になったから……。セイラ義姉さんなんて何回か肛門括約筋が切れるまでプレイして手術したって話よ。そういう経験を何度もしてるから人の限界が判るみたいだけ……」

「ある種壮絶な生き方してるんだね。セイラさんって……」

「そうよ。だから紹介するの躊躇ったのに……もう普通の生活に戻れなくなるかもよ……？やっぱりやめ

とく？」

「ははっ！自分からいいって言った事だし、世の中何でも知っておきたいってのが俺だから……。それに何かあったら責任取ってくれるんでしょ？君と同じく……」

「それは勿論……。あの人は本当に好きで信頼し合える人としかハードなプレイはしないから……」

「へっ？じゃあ俺はセイラさんに気に入られてるのかな？」

「そうよ。確か最初に会った時からだって言ってたわよ」

そう言いつつ困惑の表情を浮かべるハマーン。そんな彼女の頭をジュードーは優しく撫でた。

「安心しなつて。仮にセイラさんを君やエルと同じレベルまで愛する事はあつても、愛し合う限りは皆平等にるのが俺の生き方だから……。みんな幸せってのは理想だと思うけど、それを目指さないって理由は無いからね。政治にしろ男女の関係にしろ詰まる所は同じ事さ」

「ふふっ……。こないない男のプロポーズを断るなんて……。私って本当に罪な女よね……」

「ホント、そう思うよ。ははっ！じゃ、またね！」

社交辞令的な冗談を交わし合った後、ジュードーは手を挙げて部屋から出て行った。彼が居なくなった部屋で一人ベッドに横たわるハマーン。ふと彼が居ない寂しさが込み上げてきて涙が止めどなく溢れてきた。やがて体の汚れを洗い流そうとベッドから足を出して立とうとしたが、膝と腰に力が入らずにそのまま床に倒れ込んだ。その拍子に再び前と後ろから液を垂れ流すハマーン。

「ああ……。また……。染みにならなきゃ良いけど……」

それ以上漏らさない様に気を付けながら、床に漏らした排泄物とオシッコの始末をするハマーン。

～ ハマーンとジュドー 愛の営み ～

「ふふっ……みじめな光景よね……」

やがて後始末を終えて、バスルームに這って行き、何とかシャワーの栓を開ける事が出来た。横になつたままのハマーンに、シャワーの温水が心地よく降り注いだ。

「でも……とても幸せな気持ち……」

そのまま目を瞑りながらシャワーを浴びているハマーン。家に帰ればまた日々の生活に追われる事になるが、あとしばらくの間はこのままでもいいと思っていた。

「シヤア……貴方とは一緒に夢を見られなかったけど……今……私はとつても幸せよ……」

そう言うと、シャワーの温水に紛れて、彼女の目から一筋の涙が流れ落ちた。

— 完 —